

頭
の
中
の
千
匹
の
蜂

作 大和屋かほる

◆登場人物

- 金子良江（かねこ よしえ）……………高校教師・吹奏楽部顧問「国語」
- 角森万里（つのもり まり）……………高校の代員教師・吹奏楽部第二顧問「生物」
- 木村佐和子（きむら さわこ）……………高校生 元吹奏楽部員
- 坂口 透（さかくち とおる）……………万里の中学までの同級生 農家
- 瀬川博之（せがわ ひろゆき）……………「全共闘」過激派のメンバー
- 吉野 恵（よしの めぐみ）……………吹奏楽部員の息子を持つ母親
- 角森幸一郎（つのもり こういちろう）……………万里の父 退職教師「音楽」

1

1972（昭和47）年2月14日（月）・午後・大山国体開会式の

6日前

中国山地の連なるその山裾にぼつんとある高校。その1階にある音楽室。正面に窓。一隅にピアノや抽斗付きの書棚。机と椅子が20ほど。

石炭ストーブが燃えている。正面奥の上方に、額に入った大きめの賞状が何枚か飾ってある。客席からは読めないが、賞状には「第25回全国高等学校吹奏楽コンクール大会金賞」等の文字が入ってる。

上手側に廊下や他の教室に続く引き戸。下手にドア、その奥は少し階段になっており、半地下の、楽器置き場を兼ねる音楽準備室。

角森万里が新聞をじっと読んでいる。やがてその口から、よく聞き取れないが、恐らくそこに書かれた記事を読んでいるのだろう、ぼそぼそと、しかし一心に読んでいる声が聞こえてくる。

万里が座る机に立てかけてあった箒が床にずり落ちる。万里、一瞬目をやるが、構わず新聞を読み続ける。

そこへ、金子良江。

金子 ……万里先生。

万里 ……。(やや驚いて顔を上げる)

金子 ごめんね、忙しいのに。

万里 いえ…。

金子 そんなことまでお願いして。

万里 すいません、まだ終わってなくて…。(新聞をめくり、机上にあったハ

サミで新聞記事を切り抜き始める)

金子 昨日の閉会式のこと載ってた？

万里 閉会式？

金子 札幌オリンピック。

万里 ああ…。

金子 違うの？ なんか今、熱心に読んでたから。別の記事？

万里 読みます？ 閉会式。(新聞を分けようと)

金子 いいのいいの、それ、さっさと終わらせて。

万里 すみません。(切り抜き作業を再開する)

金子 清水先生なんてね、これで日本も大国の仲間入りだって、興奮して職

員室で大きな声出して。

万里 私の父もそんなこと云ってました、テレビ見て。

金子 あら、そう？

万里 今度は鳥取の番だって。大山国体だってオリンピックに負けとられんなんて。バカみたいに張り切っちゃって。

金子、床に落ちていた箒を拾い、室内を見渡し――。

金子 掃除もしてくれたの？

万里 あ、まだ途中で……。

金子 先生がそんなことせんでもいいのよ。

万里 たいしたことしてませんから。

金子 部員たちにさせるから先生はせんでもいいの。

万里 はい……。

金子、箒を万里に渡し、音楽準備室のほうに行く。

金子の声 毎日忙しいんでしょう？

万里 いえ。（箒をそこらに立てかける）

金子の声 放課後の練習はつき合わなくていいから。無理しないで。

万里 私も一応、顧問ですから。

金子の声　大丈夫よ、角森先生も今いらしたし。

万里　あ、来ました？

金子、手に何枚か楽譜を持って出てきて、めくりながら――。

金子　部活のことは気にしないで、今日は自分の仕事して。

万里　すみません。

金子　まともにやってもらっていないんでしょ、前田先生からの引き継ぎ。

万里　ええ、まあ……。

金子　無責任よね。

万里　校長先生がいろいろ説明してくださいましたから。

金子　非常勤の代員教師なんていいように使われるだけだから。

万里　そうなんですか？

金子　私も四年間あっちこっちの学校、掛け持ちで授業持たされたから、あなたの今の苦労わかってるつもりよ。

万里　ありがとうございます。

金子　なんて云いながら、そんな雑用させとるけど。

万里　いいえ。

金子　角森先生からも頼まれてるの、娘をよろしくって。

万里 すいません、厚かましくて。

金子 なんかいつもの先生じゃないみたい。

万里 そうですか？

金子 なんかすごく嬉しそう。やっぱり娘がかわいいのね。

万里 退職して気が緩んだんですよ。

金子 (楽譜をめくって見つつ) うらやましいわ。

万里 え？

金子 私、父親の記憶ないの。

万里 ……亡くなられたんですか？

金子 だからいい歳しておかしいけど、私今でも父親が生きてたらって思う

ことあるのよ。

万里 ……。

金子 おかしいわよね。

万里 いえ。(切り抜いた新聞記事を台紙に糊で貼り付ける)

ドアが開いて、木村佐和子が現れ、金子に気づき出ていこうとー。

金子 待ちなさい。

佐和子 (止まって) ……。

金子 何してるの？ 授業は？

佐和子 先生に呼ばれたから来ました。

金子 放課後って云ったはずよ。まだ六限目でしょ？

佐和子 放課後は忙しいんです。

金子 優先順序が違う。

佐和子 話って何ですか？

金子 放課後話すから。

佐和子 気になって授業に集中できません。

金子 いいから早く教室に戻りなさい。

佐和子 そんなに時間かかる話なんですか？

金子 吹奏楽部辞めたあなたが何がそんなに忙しいの。

佐和子 あたしだっていろいろあります。

金子 ビラを作ったりいろいろ？

佐和子 またその話。私は知らないって云ってるじゃありませんか。

金子 開会式まであと六日。今さら何ができるの。

佐和子 私は知りません。

金子 教室に戻りなさい。後でゆっくり話聞いてあげるから。

佐和子 結局お説教でしょ？

金子 お説教される心当たりがあるの？

ややあつて佐和子、ふいに出ていく。

金子

(その背に) わかった？ 放課後ちゃんと先生のところに…… (突然頭痛に襲われたように左右のこめかみの辺りを押さえる)

万里

……先生？

金子

……。(椅子に座り込む)

万里

大丈夫ですか？

金子

……うん。

万里

お疲れなんじゃありませんか？

金子

時々こうなるの。

万里

頭痛ですか？

金子

なんかね……、頭の中が、なんかわあつて。うまく云えないんだけど。

万里

保健室行きますか。

金子

大丈夫。休んでなんかられないわ。

万里

でも――

金子

楽譜、角森先生にお渡ししてくるから。(立ち上がる)

万里

私、持っていきますよ。

金子

大丈夫よ。(と云うが動かず) あの子には気をつけなさいね。

万里 え……？

金子 木村佐和子。あなたのところによく来とるみたいだけど。

万里 話を聞いてあげてるだけです。

金子 そう？

万里 いつも苛々してるから、話だけでも聞いてやれたらって思っ——

金子 とにかく引つかき回されないように気をつけて。

万里 わかりました。

金子、出ていく。

万里、台紙に貼った新聞記事を掲示板に画鋲で留める。

ゆっくりドアが開いて、佐和子が姿を見せる。

佐和子 ……万里先生。

万里 木村さん。

佐和子 金子先生帰ってくる？

万里 何してるの。教室に戻りなさいって云われたでしょ？

佐和子 帰ってくるんなら、私行くけど。

万里 話聞きなさい。

佐和子 聞いてます。

万里 じゃ教室に戻って。

佐和子 今から行ったって授業わかりませんよ。

万里 それはわかるうとする気がないからでしょ？

佐和子 (立てかけてあった箒を手にし) 先生、一つ教えてあげます。掃除は先生がしちやいけないんです。吹奏楽部員がやらなきゃいけないんです。なぜなら部員にとっては音楽室の掃除も大切な部活動の一つ。金子先生がそうお決めになったからです。

万里 立派な心がけじゃない。

佐和子 先生が決めたことってすべて正しいんですか？

万里 え……？

佐和子 先生は国体の開会式で吹奏楽部が演奏すること、どう思ってるんですか？

万里 どうって？

佐和子 どう思ってるんですか？

万里 名誉なことですよ。

佐和子 本当にそう思いますか？

万里 吹奏楽部はそのために練習遅くまでがんばってるし、金子先生だって熱心に指導してらっしゃるし。

佐和子 金子先生は吹奏楽部の知名度が上がればそれでいい人なんです。

万里 ……。

佐和子 指導力のある教師だって、他の人たちから見てもらいたいんです。

万里 いい加減にしなさい。

佐和子 部員たちは利用されてるんです。

佐和子、掲示板の前に行き、先ほど万里が貼った新聞記事を読む。

佐和子 「地元の高校吹奏楽部、大山国体開会式で晴れの演奏。練習、追い込

み。」

万里 みんな一丸となつてがんばってるじゃない。

佐和子 開会式で演奏したいって部員が云い出したわけじゃありません。金子

先生が独断で決めたんです。

佐和子、鞆からビラを取り出し、記事の上にビラを貼る。

万里 木村さん……？

佐和子 読んでみてください。お願いします。

万里 やっぱりあなただったのね。

佐和子 読んでみて。読むだけ。お願い。

万里 (読む)「国体開会式参加、断固阻止！参加阻止闘争を断固支持する！」

佐和子 どうですか？

万里 字が汚いわね。

佐和子 何枚も手書きするので大変なんです。

万里 何枚作ったの？

佐和子 昨日授業中に爆竹鳴ったでしょ？空き教室のストーブからパンパンって。開会式に参加するの反対だった人、うちの生徒の中にも結構いるんですよ。

万里 木村さんじゃないの？

佐和子 え？

万里 爆竹。

佐和子 私は授業受けてました。

万里 「何々闘争を断固支持する」なんて、だいたいやった本人たちが表明する常套句じゃない。

佐和子 そうなんですか。

万里 正直に話して。

佐和子 違います。私、そんな子どもじみたことしません。

万里 子どもじみたことを断固支持するの？

佐和子 阻止したいという行動を評価してるんです。国体、つまり国民体育大

会は国家権力による偽善的な国事行為です。私たち国民に対する欺瞞でしかありません。そんなものにどうしてうちの吹奏楽部が云われるまま盲目的に参加しなければならぬんですか？

万里 ……。

佐和子 私が云ってること間違ってますか？

万里 そういう考え方があってもいいとは思うわ。

佐和子 ……。

万里 でもね——

佐和子 (遮るように鞆から素早く取り出し) もう一枚、ビラ作ったんです。

万里 え……？

佐和子 読んでみてください。(渡しつつ) 私、先生にだけ話すだけじゃね。

万里 (目を通し) 反対集会？

佐和子 やりたいんです。

万里 本気でこんなことまで考えてるの？

佐和子 デモ行進もしたい。こそこそ爆竹鳴らしたりするんじゃないやなくて、堂々と私は反対だって行動で示したいんです。だから先生、協力して。

万里 協力？

佐和子 手書きじゃ追いつかない。人集められないんです。だから職員室のガリ版使わせてほしい。

万里 そんなことできるわけないでしょ。

佐和子 先生に協力してもらったって誰にも云いません。

万里 そんなことじゃないの。

佐和子 じゃ何？

万里 こんなことしたって何にも変わらないわよ。開会式は中止にならない。

佐和子 わかつとる。無駄な抵抗かもしれん。でも何かせんといけんような気がする。このまま黙って見てるだけじゃいけんような気がするの。

万里 ……。

佐和子 お願いッ。職員室のガリ版使わせて。先生はなんかほかの先生とは違う。わかつてくれる。私、そう思ってる。

万里 そんなに簡単に人を信用するもんじゃないわ。

佐和子 ……どういう意味ですか？

万里 何が？

佐和子 生徒が先生のこと信じたらいいけんの？

万里 そういうことじゃなくて。

佐和子 万里先生もほかの先生と同じってことですか？ あれはいけん、これはいけん、ああしなさい、こうしなさい。私たちが盲目的に従わせたいんですか？

万里 そうじゃないわよ。

佐和子 生徒に信用されない教師に、教師の資格あるんですか？

万里 え……？

佐和子 万里先生はどうして教師になったんですか？

万里 ……。

佐和子 教えてください。どんな教師になりたくて教師になったんですか？

万里 ……。

佐和子 教えてください。

ふいに、窓の外に男が現れて――。

男 おーいッ、ここ開けてくれエ。

ややあつて万里、佐和子を気にしつつも、機敏に窓に近づいて窓を開ける。

男は坂口透。両手に抱えていた段ボール箱を窓枠に乗せ――。

坂口 ありがとう。

万里 どうしたの？

坂口 (段ボールを示し) 差し入れ。

万里 また持ってきたの？

坂口 青年団挙げて応援しとるんだけん。

万里 いいのに。

坂口 地元のためにもがんばってほしいけんな。

佐和子 先生、今の話、本気だから。（行こうとする）

万里 ちよっと待って。

佐和子 教室に戻ります。

万里 木村さん。

佐和子 私、先生のこと信用しとるけんね。

佐和子、出て行く。

坂口 あの子、また何かしたんか？

万里 またって、坂口君、何か知ってるの？

坂口 金子先生から聞いとらんか？

万里 何を……？

坂口 じゃ、しょうがねえなあ。（窓枠に足をかけつつ）ちよっとお邪魔します。

万里 そこで話せばいいじゃない。靴、ちゃんと脱いでよ。

坂口 脱ぐよ。金子先生に見つかったらえらいことだけんな。（長靴を脱ぎ、

隅に置く）

万里　で、何なの？ 木村さん、何か問題起こしたことがあるの？

坂口　万里ちゃんが来る前におった先生、あのホラ、もう一人の顧問の先生。

万里　前田先生？

坂口　その男の先生とキスしとったって話だ。

万里　木村さんが？ まさか……。

坂口　校長先生もそげな先生置いとけんわな。

万里　本当なの？

坂口　俺はよう知らんけど学校中で噂になっとったらしい。そら本人も居づらかったんだらうな。

万里　前田先生はそれで休職したの？

坂口　結局は本人たちしか知らんことだけん、あの子も部活辞めてしまったし。

万里　……。

坂口　今、あの子になんか頼まれとったんか？

万里　そんなんじゃないの。

坂口　あの子は頭はいいし、はつきりものも云うし。今度は「学生運動」みたいなこと始めたって聞いたぞ。

万里　……。

坂口　そげなことは東京での話だ。

万里 ……。

坂口 (窓に行きつつ) 明後日から雪だつて。さっきラジオで云つとつた。

万里 そう……。

坂口 雪が足りんつて聞いたとつたけんよかつた。せつかく笠谷が来るに、ジャンプ見られんかつたらいいけんしな。

万里 見たいの坂口君。

坂口 そりゃオリンピックで金メダルとつたジャンプいうもんをこの目で見てみたいがな。

万里 そうね。

坂口 開会式は豪円山(ごうえんざん)だろ？

万里 うん。吹奏楽部は豪円山のグレンドで演奏するの。

坂口 自衛隊の連中が整備したつてテレビで映しとつた。

万里 うちの男の先生たちは、会場の警備で動員がかかつたつて文句云つてたけど。

坂口 それでパトカーが停まつとつたんか。

万里 パトカー？

坂口 うん、玄関に。

万里 |——|。(やや驚く)

坂口 違うんか？

万里 え……？

坂口 警備のことじゃないんか？

万里 そうなんじゃない、たぶん。結構あれこれうるさいみたいだから。

坂口 そうか。大変だな、先生もいろいろ。

万里 ……。

坂口 ……じゃ俺帰るけん。

万里 あ、そう？

坂口 それみんなに分けたって。干し芋食うかどうかわからんけど。

万里 忙しいのに、いつもごめんね。

坂口 全然。この時期の農家は暇でいけん。

万里 お母さんによろしく。

坂口 ああ。

坂口、行こうと窓際に近づくが、ふいに止まり、

坂口 やっぱり帰るのやめた。

万里 え？

坂口 今日は話さずに帰ろう思って我慢しとったけど、やっぱり我慢できん。

万里 ……。

坂口 この間の話、ちよつとは考えてくれたか？

万里 うん。

坂口 あ、すぐに返事せんでもいいんだけど。

万里 うん。

坂口 もしかして好きな人おるんか。そらおるわな。

万里 いないわ。

坂口 いやおってもいいんだ。おらんほうがいいけど。

万里 いないよ。

坂口 こんなこと云って変に思わんでほしいんだけど。

万里 なに？

坂口 この前、駅裏んとこで万里ちゃん見かけたって、おふくろが云つてて。

万里 ……。

坂口 見たことない男と話（はなし）しとったって云うもんだけん。そら万里

ちゃんには、おふくろが知らん男の知り合いもいっぱいおるだろうけど。

万里 知った人に会ったもんだから、

坂口 そうか。

万里 ちよつと立ち話しただけ。

坂口 うん。

万里 それだけ。

坂口 様子が変だったなんておふくろが云うもんだけん。

万里 ……。

坂口 やっぱり農家の嫁になるのは嫌か？

万里 どうして。

坂口 来年の教員採用試験受けるんだろ？

万里 どうかな。

坂口 受けるのか？

万里 教師に向いていない気がするの、私。

坂口 農業嫌だったらせんでもいい。

万里 農業が嫌いなんじゃないのよ。

坂口 そうか。

万里 うん。

坂口 万里ちゃん覚えとるかな。中学ん時に俺んちの田圃で田植えしたの。

万里 ああ、覚えとる。

坂口 なんかの行事だったんかな。先生もいて、同じクラスのヤツらと一緒にうちの田圃に入って田植えした。

万里 あれ、楽しかったよね。

坂口 俺はちっとも楽しくなかった。自分ちが農家だっていうんも恥ずかし

かったし、おふくろやまだ元気だったばあちゃんが嬉しそうにみんなに田植えを教えとるのも恥ずかしかった。

……。

でも万里ちゃんが俺に話しかけてくれて。

うん。

なんて云ったか覚えとる？

……忘れた。

忘れたかあ。

ごめん。

でもそれで救われた。話しかけてくれんかったら、俺は不良になつたつたかもしれない。

大げさね。

大げさに云ってみた。

……。（少し笑った）

……。

そんな頃もあったね。

万里ちゃん。

なに？

万里ちゃんには俺が一生かかっても踏み込めんようなところがある気

がする。

万里 ……。

坂口 それでも俺は万里ちゃんと結婚したいと思つとる。

万里 ……。

万里、じつと坂口を見詰める。そこへ、角森幸一郎が現れて――。

幸一郎 ……なんだ、来とつたか。

坂口 いや、ちよつと差し入れ持って来ただけで。

幸一郎 そうか。

万里 ……。(準備室のほうへ行く)

坂口 幸一郎先生はこれから練習ですか。

幸一郎 俺なんかもうおらんでもええようなもんだけどな。

坂口 金子先生は頼りにしとんなると思いますよ。

幸一郎 そう云つてもらえりや、退職したもん(者)も出て来る甲斐があるつてもんだがな。

坂口 先生は変わらんですよ、昔っから。

幸一郎 そうか。

坂口 じゃ帰ります。

幸一郎 ああ。

坂口 ほんなら万里ちゃん、また。

万里の声 うん。ありがとう。

幸一郎 万里、何しとる。

万里の声 ちよつと。

幸一郎 坂口が帰る云うとるぞ。

坂口 ああ、いいですから。

幸一郎 万里。

坂口 いろいろ忙しいみたいで。

幸一郎 万里。

万里 (出てきて) じゃまた。

坂口 うん、じゃ。(幸一郎に) それじゃ失礼します。

幸一郎 ああ。

坂口、窓から出るのを止め、長靴を持ってドアから出て行く。

幸一郎 ……今、警察が来とるのは知つとるか？

万里 坂口君が今そう云つてたけど。

幸一郎 おまえに聞きたいことがあるって云つとるらしい。

万里 ……。

幸一郎 どういうことだ。

万里 校長室ですか？（行こうと）

幸一郎 警察がおまえに何を聞くことがある。

万里 わかりません。

幸一郎 やましいことはないんだな？

万里 （振り返って幸一郎を見る） ……。

幸一郎 昨日の事件と関係あるのか？

万里 ……。

幸一郎 全共闘の過激派が松江相銀の米子支店を襲撃。メンバーの一人はまだ捕まっとらん。新聞にでかでかと出とっただろ。

万里 新聞読んでないから。（行こうと）

幸一郎 （背広の内ポケットから新聞の切り抜きを取り出して読む）「押し入った犯人の一人が行員五人と客二人に猟銃を突きつけて脅し、他の一人が現金ボックスにあった約六百万の札を袋に詰め込み、外に待たせておいた乗用車で逃走——」。

万里 お父さん。

幸一郎 「県警本部は同日午後、伯備線の列車内と岡山県新見市で一昧と見られる二人を相次いで逮捕。うち一人は、写真照合などの結果、全共闘の

過激派グループのメンバーと判明。引き続き、車に乗って逃げた男の行方を――。」

万里 お父さん、もういい。

幸一郎 （読むのを止め）知り合いなのか？

万里 私はもう関係ない。

幸一郎 ……。

万里 ほんとよ。関係は全部断ち切って、私は米子に戻ったの。

幸一郎 親戚の中には、口には出さんが、おまえのことを学生運動にのめり込んだ「アカ」だと思つとるモンもおる。

万里 全共闘も何もみんな「アカ」になっちゃうんでしょ、お父さんたちは。

幸一郎 まともな連中じゃない。

万里 ……。

幸一郎 東京でのことは忘れて、ここでちゃんと教師になるんだ。

万里 わかってるから。

幸一郎 金子先生に協力して、国体の開会式を成功させりやおまえも一人前の教師だつて見てもらえる。

万里 わかってる。

幸一郎 人間は生まれ変わることができるとだ。

万里 私は私よ。

幸一郎 おまえを信じとるぞ。

万里 ……。

幸一郎 信じとるぞ。

万里 そんなこと簡単に云わないで。

幸一郎 ……。

万里 お父さん昔からよくそう云ったわ。「おまえを信じてるぞ」。ほかの生徒にもよく云ってた。

幸一郎 ほんとのことだ。

万里 それでがんばれる生徒もいるかもしれないけど、「脅迫」にしか聞こえない生徒だっているのよ。

幸一郎 脅迫とは何だ。

万里 お父さんはどうして教師になったの？

幸一郎 なに？

万里 私、さつき生徒に聞かれたの。「なんで教師になったのか」って。

幸一郎 ……なんて答えた？

万里 答えられなかった。

チャイムが鳴る。

万里 情けない。自分が今やっていることを私、胸張って云えないのよ。

幸一郎 おまえはもう東京にいた頃のおまえとは違うんだ。

万里 云わないで。

幸一郎 さっき自分で云ったじゃないか、全部断ち切って戻ってきたって。

万里 ああ嫌だッ。

幸一郎 万里……。

教室のざわめきが聞こえてくる。

続いて、吹奏楽の演奏が華やかに聞こえてくる。

万里、校長室へと向かう。

2

1972（昭和47）年2月17日（木）・午後・大山国体開会式の

3日前

吹奏楽の音楽。『シンフォニック・ファンファーレ』。

それにかぶって、微かに蜂の羽音が聞こえる。

金子が座っている。羽音、次第に大きくなる。金子、立ち上がって指揮をする。誰もいない音楽室に向かって。

突然、窓ガラスの外に男が現れる。男、中の様子を伺っていたが、窓ガラスを叩く。金子は気づかない。男、強く叩く。金子、ようやく気づき――。

――。　（驚く）

こんにちは。

……。

ちよつといいですか？

金子　（胸をさすって息を吐き）びっくりした。

金子、ステレオのテープを止める。

男 すいません、脅かすつもりじゃなかったんですけど。

金子 (警戒して) 何ですかあなた。

男 怪しいもんじゃありません。ちよつと聞きたいことあって。

金子 どういったことですか？

男 ここ、開けてもらっていいですか。

金子 (いったん窓を開けて) 用事がありなら玄関に回ってください。(閉めようとする)

男 (それを止めて) いやちよつとだけですから。

金子 どちら様ですか？

男 この学校に角森っていう先生いますか？

金子 父兄の方ですか？

男 いやそうじゃないけど――

金子 角森が何か？

男 あ、いるんですね、角森万里。

金子 どういったお知り合いですか？

男 いやいるならいいんです。今日出勤してますか？
金子 ええ。

男 助かりました、どうも。(去っていく)

金子 (身を乗り出して) ちよつとあなた。(男の行ったほうを見る)

ドアが開き、万里と吉野恵。吉野は手荷物を持っている。

万里 金子先生。

———。(やや驚いて振り向く)

万里 吉野君のお母さんがお見えになりました。

吉野 お忙しいときに何度もすいません。

金子 (吉野に軽く会釈し、万里に) 今あなた訪ねて男の人が。窓の外。

万里 え……？(窓へ)

金子 あなたがいるならそれでいいって、向こうに行っただけ。

万里 ……。

金子 若い人だったわよ。心当たりある？

万里 いいえ。

吉野 あっち回って、見てきたらどうですか？

万里 いえ、いいんです。(窓を閉める) それより吉野君のことを。

金子 (椅子を勧め) どうぞ。

吉野 すいません。

金子 まだ連絡ありませんか。

吉野 ほんとにどこほつつき歩いとるんだか。

万里 学校にもまだ来てないようです。

吉野 それで先生、やっぱり警察に行ったほうがいいんじゃないかって思いました。

金子 ちよつと待っててください。今朝特に変わったところはなかったんですよね？

吉野 ええ、学校行ったもんとばかり思ってたんです。いつつも「行つてきます」もなんも云わんで出ていくもんで。

金子 そうですか……。

吉野 やっぱりもうちよつと待つとったほうがいいですかね？

万里 日が暮れると心配ですよ。

吉野 風邪ひいたって死にやせんですけどね。

金子 夕方まで待ってみましょうよ、お母さん。

吉野 (迷いながら) ええ……。 (ややあって) そのほうがいいですか？

金子 うちの若い先生たちにも探しに行ってもらいますから。

吉野 そら悪いですね。

万里 警察に届けたほうがいいですよ。

金子 (吉野に) 手分けして探せば、案外あっさり見つかるかもしれませんし、

警察に行くのはその後でもいいんじゃないやありません？

吉野 (迷いながら) ええ……。先生がそう云いなるんなら、まあ……。

金子 じゃそうしましょ。もう少し待ちましょう。

万里 (吉野に) いいんですか？

金子 いいのよ。騒ぎが大きくなったら吉野君だってかえって戻りづらくなるでしょ。

吉野 あの、先生これ、皆さんで。(手荷物を開けて差し入れを出す)

金子 お母さん、こんなときまで気を遣わないでください。

吉野 いつも同じようなもんばかりで恥ずかしいですけど。(渡す)

金子 すみません、わざわざ。(受け取って万里に渡す)

万里 今までこんなことあったんですか？

金子 いつも何か持ってきてくださるのよ。

万里 いえ吉野君、今まで無断欠席なんてなかったんでしょう？

吉野 実はあの子、怖くなったんじゃないかって思うんです。

金子・万里 ……？

吉野 国体の開会式、もう明明後日でしょ？ 自信がないもんで逃げ出したんですよ。

金子 そんなことありませんよ。

吉野 いやあ、男ん子のくせに意気地がないもんで。ほんに逃げた亭主そつ

金子 くりで困ったもんです。先生は亭主、知っとんなったかいな。
いいえ。

吉野 あの子が中学んときに、外に女ができて、私に見つかったもんですー
つと逃げ出して、それ以来家に帰って来んようになって。

金子 そうですか。

吉野 そげな男の子もだけん、あの子は勉強もできんで、学校の成績もよ
うないし、運動やらせりやもたもたしとって、家でもはきはきしゃべら
んし。

金子 がんばってますよ、部活は。ねえ万里先生。

万里 はい。一生懸命やってますよ。

吉野 一度、もう吹奏楽部辞めたいって云い出したことがあって、私怒った
んです。今辞めたら金子先生や他の部員さんたちに迷惑がかかるって叱
りつけたんです。

金子 それ、いつ頃のことですか？

吉野 さあ半年ぐらい前だったかいな。

金子 半年前……。

万里 (吉野に) 何かあったんですか、その頃。

吉野 (金子に) なんも聞いとんならんですか？

金子 さあ、私は何も。

吉野 前おられた顧問の先生、何ていいなったかいな。

万里 前田先生ですか。

吉野 ああ、その前田先生が休職したりして、あの子はある口に出して云う子じゃないけんようわからんですけど、何ぞ嫌なことでもあったんだらうって思っと思ったんです。

金子 ……………。

吉野 そいでもそげなことは人間にはようあることだけん、がんばらんといいけんって云ってやったんです。あの子から今吹奏楽部とったら何にもないけん。

金子 吉野君はいい子ですよ。

吉野 いいんです、母親の私が云うんだけん。それでも今度のこととはほんとに名誉なことだっと思ってとるんです。宮様もおいでになるという話聞いて、そんな人たちの前で演奏さしてもらえるなんて。近所の人からも息子さんが国体で演奏しなるんだって云ってもらって、私も鼻が高かったんです。先生のお陰です。

金子 いえそんな…………。

吉野 男の子だけん、せめて一生にいつペンぐらい、胸張って云えるようなことさしてやりたい思っ…………。(ふいに涙ぐむ)

金子 大丈夫ですよ。吉野君、すぐに戻ってきますよ。

吉野 がんばらせませすけん、見捨てんでくださいね。

金子 何云ってるんですか、お母さん。当たり前じゃありませんか。

吉野 ……まあ、柄でもない。先生の前で恥ずかしい。

金子 ……。

吉野 先生、あの子ね、いっちょ前に好きな子ができたみたいで。同じ吹奏楽部の生徒さんで、なんだかフルーツが上手な女の子さんじゃないかって睨んどるんです、私。

金子 吉野君、そんなこと云ったんですか？

吉野 云わんでもわかりますよ。

金子 そうですか。

吉野 そげな生徒さん高嶺の花だに、身の程知らずで、そげなところも亭主にそっくりですわ。

そこへドアが開いて、木村佐和子。

佐和子 先生、来ました。

金子 ちよつと外で待っててくれない？

佐和子 待つんですか？

吉野 いいです先生、私いっぺんうちに戻ってみます。

金子　　そうですか？　なんかあったらすぐに知らせてくださいね。

吉野　　戻ったったら練習には行かせますけん。

金子　　お願いします。

万里　　木村さんは何か知らないの？

金子　　万里先生、いいから。

佐和子　　どうしたんですか？

金子　　万里先生、お母さんを玄関までお送りして。

吉野　　先生にはほんとに感謝しとるんです。あげな子をよう見捨てんでここまで指導してくださって。

金子　　そんなこと云わないでください。

吉野　　搜索願は先生がそう云いなるんならもうちよつと待ってみます。警察沙汰にならないですむんならそれがいいですもんね？

金子　　ええ。

吉野　　（ふいに）　　そういえば今日なんかあったんですか？

金子　　え……？

吉野　　さつき生徒さんたちが廊下で騒いどんなったみたいですけど。

金子　　なんでもありませんよ。

佐和子　　集会です。

吉野　　集会？

佐和子 吹奏楽部が国体の開会式で演奏するの、私たち反対なんです。

金子 そんなこと今ここで云ったってしようがないでしょう。

万里 お母さん、行きましょう。

吉野 ええ、でも……。

万里 行きましょう。今は息子さんのことをいちばんに考えないと。

万里、吉野を伴って出ていく。音楽室には金子と佐和子。

佐和子 吉野君のお母さんですよ。吉野君どうかしたんですか？

金子 そのことであなただんじやないの。

佐和子 私には関係ないってことですか。

金子 関係ないわね。

佐和子 吹奏楽部辞めたからですか？

金子 座んなさい。聞きたいことあるから。

佐和子 ……。(座らない)

金子、机から恐らく数十枚あると思われるビラを取り出し、佐和子に突き出す。

金子 見覚えあるわよね？

佐和子 (ゆっくりと見て) ああ、今朝、いっぱい貼ってありましたね。

金子 そう、ここの壁一面に貼ってあったの。ご丁寧に生徒玄関にも。

佐和子 ……。

金子 全部あなたが貼ったんでしょ？

佐和子 そうですよ。

金子 ……。

佐和子 だからそれ、私のですから返してください。

金子 自分がしてることわかってるの？

佐和子 結局できなかったじゃないですか反対集会、生徒指導部の先生たちに

止められて。私、北島先生に云われるまで全然知らなかったんですよ、学内で生徒の政治活動は禁止されてるって。

金子 当然でしょ。政治活動をするためにあなた、高校に入学したわけじゃないでしょう？

佐和子 なんで北島先生は集会のこと知ってたんですか？

金子 ビラを見たんでしょよ。

佐和子 なんで北島先生は私が首謀者だって思ったんですか？

金子 日頃のあなたを見てれば誰だってわかるわ。

佐和子 先生が云いつけたんでしょ？

金子 ……。

佐和子 北島先生、金子先生から聞いたって云ってましたよ。

金子 遅かれ早かれあなたは呼び出しを受けてたわ、（ビラを示しつつ）こんなことしてるんだから。こんなことしてみんなを煽ってるんだから。

佐和子 意見を言えば、それは煽ってるってことになるんですか？ 考えを主張すれば、それは政治活動ってことになるんですか？

金子 廊下で騒いでた生徒たちはみんな面白半分じゃないの。

佐和子 違います。そのビラを読んで賛同したんです。

金子 あなたがそう思ったがってるだけ。誰も本気じゃないわ。

佐和子 賛同してくれる同志はいます。返してください。

金子 へえ、あなたに同志なんていたの？

佐和子 返してください。（金子の持つビラを奪い取る）

金子 それどこで印刷したの？ あなたガリ版なんて持ってた？

佐和子 ……。

金子 それとも、その賛同してくれる同志が協力してくれたのかしら？

佐和子 先生に云う必要ありません。

金子 万里先生でしょ？

佐和子 違います。

金子 万里先生に協力してもらって職員室の使ったんでしょ？

佐和子 万里先生は関係ありません。

金子 万里先生は認めたわよ。

佐和子 ——。

金子 仕方なく職員室のガリ版使わせたって、あなたが泣きついて頼んだから。

佐和子 泣きついてなんかいない。

金子 (ややあって) やっぱ子どもね。

佐和子 あ……。

金子 万里先生とはまだ何も話してないわ。

佐和子 ……汚い。

金子 そんなビラ、こそこそ貼って回るほうが汚いと思うけど。

佐和子 こそこそなんかしてない。堂々と反対闘争してます。

金子 「反対闘争」だなんて、あなた全共闘にでも入りたいの？

佐和子 反対意見を表明することは正当な権利です。

金子 そんなに私のことが嫌い？

佐和子 ……。

金子 どうなの？

佐和子 先生は私に嫌われる覚えがあるんですか。

金子 ……。

佐和子 どうなんですか？ 身に覚えがあるんですか？

金子 あるわよ。

佐和子 じゃ「自己批判」してください。私の前で「総括」してください。

金子 総括……？

佐和子 するべきです。

金子 (ややあって)それがあなたの本音でしょ。

佐和子 ……。

金子 あなたは、うちの部員が国体で演奏することなんかほんとはどうでもいいのよ。私に仕返しをしたいだけ。

佐和子 ……。

金子 認めなさいッ。

佐和子、持っていたビラを金子に叩きつける。散乱するビラ。

佐和子 ……。

金子 木村さん、勘違いしないで。私はあなたと「闘争」がしたいんじゃないの。むしろ逆。もしあなたが吹奏楽部に戻りたいって云うんなら喜んで迎えるわ。

佐和子 自己批判しないんですね。

金子 あなたは私を恨んでる。それは知ってる。でもね、人間には逆恨みつてことがあるの。特にあなたのような未熟な人間には。

佐和子 なぜ話を誤魔化すんですか？

金子 でも人間は、自分が未熟だって気づいたときから未熟じゃなくなるの。わかる？

佐和子 ええ、わかります。私は未熟、考えが未熟。行動が未熟。百万回聞かされましたから。でも先生は私が先生の思い通りにならないから、それが気に入らないだけ。

金子 大人になってよ、木村さん。

佐和子 ……。

金子 吹奏楽部の演奏を中止に追い込んだって、損するのはあなたなのよ。反抗的な態度とり続けて問題行動を起こせば、指導委員会にかけられて処罰を受ける。そんなことになったらあなたの進路にも差し支えるのよ。

佐和子 ……云いたいことはそれだけですか？

そこへ万里、戻ってくる。散乱するビラに驚きつつ――。

万里 ……どうしたんですか？

金子 聞いて、万里先生。

万里 はい……？

金子 木村さんが吹奏楽部に入部してきたときね、彼女のフルートの音聴いて私、びっくりしたの。

万里 ……。

金子 とっても澄みきったきれいな音。純粹で、しかも伸び伸びとして——

佐和子 やめてください。

金子 私嬉しくなって、こんな音を出す子が入部しましたって角森先生にわざわざ電話までしたの。この子と三年間いっしょだったら、きっといい演奏ができる。とっても楽しみだったの。

佐和子 そんな話して、私が気が咎めるとでも思ってるんですか。

金子 私は本心からそう思ったのよ。今でもそう。だから、あなたが吹奏楽部に戻ってきたいんなら、私もその方向で考える。それでよくない？

佐和子 金子先生……。

金子 なに？

佐和子 先生は卑怯です。

佐和子、ドアを開け放して出ていく。

万里 木村さんっ。

金子
ほっときなさい。

金子の頭の中でふいに何か騒ぐ。両耳のあたりを押さえる金子。

万里
……先生？

金子
………。(万里を押しよけるようにして散乱しているビラを拾い始める)

万里
………。(拾い始める)

金子
印刷を手伝ったの、万里さんなんですよ？

万里
………。

金子
木村が話したわ。

万里
………。

金子
どういふつもり？

万里
木村さんが私に手伝ってもらったって云ったんですか？

金子
そうよ。

万里
本当ですか？

金子
先生のことには誰にも云わないからなんて云ったんですよ。

万里
………。

金子
だからあの子には気をつけなさいって云ったじゃない。

万里
私は、彼女が名前を出さないって云ったから協力したわけじゃありません。

せん。それに先生にもお話するつもりでした。本当です。

金子 じゃ聞かせて。どうして協力したの？ する必要があるの？

万里 木村さんの思いというか、やろうとしてることはわかる気がするんです。

金子 国体の開会式で吹奏楽部が演奏するのを邪魔しようとしてるのよ。

万里 邪魔とは違うと思うんです。異議を唱えてるっていうか――

金子 あなたも国体での演奏は間違いだって思ってるの。

万里 そうは思ってません。

金子 ……理解できない。

万里 思ってませんけど、反対意見を持つ人間に何もさせない、何も云わせないっていうのはフェアじゃないと思うんです。

金子 ……。

万里 ……。

金子 誰だっけ、ヨーロッパの思想家が云ってたわね。「あなたの意見には反対だが、あなたがそれを云う権利には賛成する」。そういうこと？

万里 ……はい。

金子 つまり万里さんは、それがどんなことであっても、一個人としての木村の考え方を、木村の自主性を尊重するべきだって、そう思ってるの？

万里 すいません。生意気なこと云ってるって思いますけど――

金子 騙されちゃいけないのよ、ああいう子には。

万里 騙すってどういうことですか。

金子 教師なら問題が起らないように学校を守るべきでしょう。しっかりと。あなたも吹奏楽部の顧問なのよ。

万里 ……そうでしょうか。

金子 え？

万里 先生は私のこと、同じ顧問だと思ってますか？

金子 思ってるわよ。

万里 臨時の代員教師にすぎない。そう思ってらっしゃるんだと思ってました。

金子 だったらそれでいいじゃない。

万里 ……。

金子 私にどう思われてるかなんて、そんなこと、あなただってホントはど
うでもいいでしょう？

万里 ……。

金子 こんなこと云いたくないけど、来年、県から吹奏楽部に特別予算が付
くことになってるの。校長は余所にも回す考えらしいけど、私としては
新しい楽器が買えるし、あなたのお父さまにも今よりもう少し謝礼をお
渡しすることもできる。

万里 ……。

金子 もちろんそんな予算のために国体で演奏するわけじゃないけど、こういうことの積み重ねが実績として認められていくの。

万里 ……。

金子 だから今回も、なんとしても成功させなきゃならないの。

万里 それでまた実績を積み上げていく。

金子 そうよ。だから協力して。

万里 その「実績」って誰の実績ですか。

金子 誰の？

万里 ええ。

金子 吹奏楽部の実績よ。それ以外にある？

万里 ……そうですね。

金子 今回のこと校長には報告しないから、これからは気をつけて。

万里 ……。

金子 さあ、あと三日しかないんだから、放課後の準備、手伝ってちょうだい。

万里 今回の件、校長先生に報告していただいて結構です。

金子 ……どういうこと？

万里 木村佐和子にだけ処分を受けさせて、私頼っ被りなんかできません。

金子 いい加減にしてッ。
万里 裏切ることはできません。

金子の頭の中で何か騒ぐ。頭の中のそれを振り切るように――。

金子 若い頃は、自分が学校に新風を吹き込んでやれるって思うもんなの。
万里 そんなこと思っていない。

金子 私にも覚えがある。古手の先生たちはいかにも保守的で融通が利かなくて、しかもそれを変えようとしなない。生徒たちはそんなこと求めてるんじゃない、自分はずっと違うことがしてやれる、そう思いこんで――

万里 私は違います。
金子 いっしょなの。

万里 違いますッ。私はただ木村さんを助けたいと思っただけです。

金子 あなたは木村佐和子を買いかぶってる。あの子はタチが悪いわよ。

万里 教師が生徒のことをそんなふう云っていいんですか。

金子 教師だからわかるの。

万里 欺瞞です。「自己批判」すべきです。

金子 ……自己批判？

万里 ……。

金子 さつき同じことを木村が云ったわ。

万里 ……。

金子 あなた「全共闘」だったの？

万里 ……。

金子 「自己批判」「総括」。そんなことに明け暮れてた人なのね。

万里 ……もう終わったことです。

金子 考え方の根っこは変わってないんじゃないの？

万里 ……金子先生、一つ教えてください。

金子 ……。

万里 先生はどうして教師になったんですか？

金子 忘れたわ。

万里 ……。

金子 覚えてないわ、そんな昔のこと。

万里 それで教師を続けていられるんですか。

金子 続けられるわよ。辞めないでいるとね、続けられるの。

万里 ……。

金子 国体が終わるまで、あなたには手伝ってもらいます。不祥事を起こせばあなたのお父さまにだってご迷惑がかかるのよ。

万里 ……。
金子 それ、もらっとくね。

金子、万里の持っているピラを示す。万里、差し出す。金子、受け取って――。

金子 教師を続けてるとね、「自己批判」する暇もないの。自分のことなんかにかまってられないもの。「総括」なんてね、自分のことにかまけていられる人間たちのやることよ。

万里 ……。
金子 そうでしょ。違う？

金子、去る。

万里 ……。

不意に窓の外に男。さっき万里を訪ねてきた男が現れる。

男 (万里を見ている) ……。

男、窓ガラスをこつこつと叩く。万里、驚く。

男、さらに窓ガラスを叩く。万里、動けない。男、窓ガラスを叩き続ける。

3

翌日・2月18日（金）・夕刻・大山国体開会式の2日前

音楽室の真ん中に男・瀬川博之が座っている（靴のまま）。

ふいに立ち上がってピアノの前に行き、フタを開けて、人差し指で一つ二つ音を出す。そのうちそれがメロディになり、歌い出す。

瀬川

（『ハチのムサシは死んだのさ』を口ずさむ）

そこへ、窓ガラス越しに吉野。こんこんとガラスを叩き――。

吉野

あの、すみません。

瀬川

（慌ててピアノのフタを閉め）は、はい。何でしょう。

吉野

こんなところからすみません。吉野健（たけし）の母親です。

瀬川

……？（ガラス窓を開ける）

吉野

昨日、学校さぼって行方がわからんようになった吉野健です。

瀬川

……ああ、吉野君の。

吉野 先生ですよ、こちらの。

瀬川 はい、そうです。

吉野 そうですか。

瀬川 ええ。

吉野 (風呂敷包みを差し出し) これ皆さんで。お口に合うかどうか。

瀬川 ああ、すいません。(受け取る)

吉野 ほんとお騒がせして、お詫びに伺わないけんって思っと思ったんですけど、朝からばたばたしとって。

瀬川 どうぞ、こつち。上がって来られませんか。

吉野 いえここで。もう失礼しますけん。

瀬川 そうですか。

吉野 先生方にはお忙しいのに、あの子探してもらって。

瀬川 よかったですね。無事だったんですよ？

吉野 はい、ありがとうございます。あれからあの子問い詰めたら、自分には演奏する資格がないなんて云い出すんですよ。

瀬川 資格、ですか？

吉野 自分は卑怯者だって、急にそげなこと云い出して。

瀬川 ……難しい年頃ですからね。

吉野 先生、吹奏楽部に木村さんという生徒さんはおられますか？

瀬川 ええっと、木村ですか……。木村がどうかしたんですか？

吉野 うちの子が木村さんを助けてあげられんかったって云うもんですけん。助けてあげられんかった？

吉野 何のことだつて聞いても、そっからは黙ってしまつて……。

そこへ、ドアを開けて万里。

万里 ……！

吉野 先生、昨日は遅くまですいませんでした。

万里 いえ、よかったです、無事に見つかつて。

吉野 ご迷惑かけたお詫びにと思つて、こちらの先生にお渡ししときましたけん、また皆さんで。

瀬川 ……。(風呂敷包みを示す)

万里 ……。

吉野 あの、金子先生は？

万里 今、市役所からお客さんが来られてて。

吉野 お忙しいですな。よろしくお伝えください。

万里 吉野君、どんな様子ですか？

吉野 もう大丈夫です。明日の練習には朝から行かせますけん。

万里 無理しなくていいんですよ。

吉野 いいえ、休んだる暇なんかありません。もう明後日ですから。首に縄つけてでも連れてきますけん。一人だけ勝手なことしとるわけにはいきませんけん。

万里 ……わかりました。

吉野 それじゃ私はこれで。

万里 差し入れ、ありがとうございました。

吉野、去る。音楽室に万里と瀬川、二人きり。

瀬川 ……。

万里 何のつもりですか。

瀬川 向こうが勝手に勘違いしたんだよ。

万里 どうしてこんなところにいるんですか。

瀬川 頼みがあるって云ったろ。

万里 出ていってください。だいたいどうやって入ったんです？

瀬川 いや、その窓。

万里 鍵かかったでしよ。

瀬川 まあ、一応。

万里
見る）
……。（窓に近づくときガラスの一部が割られていることに気がつき、瀬川を

瀬川
はじめっから割れてたよ。

万里、ドアの方に行き、出ていこうとする。瀬川、回り込み――。

瀬川
どこ行くんだよ。

万里
どいてください。不法侵入です。

瀬川
聞けよ、話。

万里
どいて。大きな声出しますよ。

瀬川
誰か来たらおまえも困るんじゃないのか？

万里
誰かッ！

瀬川
（いきなり万里の口を手で押さえ）騒ぐなよ。

万里
（抗いつつ）放してッ。

瀬川
こんなことがしたいんじゃない。

万里
放してッ。

瀬川
静かにしてくれ。

万里
（腕に噛みつく）

瀬川
（思わず手を離し）痛ッ……！！

万里、距離を取って離れ、身を守るように体をこわばらせる。

瀨川 変わらないな。

万里 この前は駅裏、今度は学校、いきなり現れて何だっていうんです。私
はもう関係ないんです。

瀨川 おまえは逃げただけだろ。何もかもほっぽり出して。

万里 ……。

瀨川 闘争からも俺たちからも、おまえは逃げたんだ。

万里 瀨川さんも逃げてるんでしょ。松江相銀の襲撃に失敗したから警察に
追われてるんでしょ？

瀨川 ……。

万里 新聞読んでわかりました。あの日、私に協力させたかったんですね。

瀨川 けどおまえは突っぱねた。いとも簡単に他人の顔をした。

万里 銀行を襲うなんて、そんなの革命じゃない、間違ってます。

瀨川 間違ってるさ。革命闘争のための資金調達、ブルジョワ的私的所有の
全否定、もっともらしいお題目並べたてたって、要するに自分たちの生
活が苦しくなったってだけの話だよ。

万里 自己欺瞞です。じゃ、どうしてそんな襲撃に加わったんです。

瀬川 俺はな、おまえと違って簡単にイチ抜けたーなんてできないんだよ。

万里 ……。

瀬川 おまえはいいときに逃げ出したよ。

万里 ……どういう意味ですか。

瀬川 おまえの云う通りだ。俺たちがやってることは革命でも何でもなし。革命なんて起こせっこないんだよ。

万里 ……信じられない。本気で云ってるんですか？

瀬川 ベトナム戦争おっぴじめたアメリカにアジア侵略戦争を即時止めさせ

る。それが俺たちの出発点だったはずじゃないか。日本がアメリカに追従するつもりなら断固阻止する。安保条約の自動延長、断固阻止。60年

安保の敗北は繰り返さない。そのための反対闘争だったはずだ。それがいつの間にか「革命」だよ。

万里 瀬川さんだって二年前はそう云ってた。

瀬川 認識が甘かったんだよ。武力闘争に方針転換したその結果はどうだ？ 何人もの犠牲者、大量の逮捕者を出しただけ。

万里 私に武力闘争の必要性を説いたのは瀬川さんです。

瀬川 信じてたからな、革命を。

万里 テレビで米軍の空爆の映像見たら、社会を変革する手段は武力以外に

ないって思ったって。圧倒的な武力を前にして、いくら言葉を尽くしても無駄だって。火炎瓶の作り方教えてくれたのも瀬川さんでした。

瀬川
それで結局どうなった？ おまえは何事もなかったかのように高校教師に納まり、俺は警察に追われてる。

万里
……………。

瀬川
状況は何にも進展していない。むしろ後退だよ。組織だって弱体化してる。大衆は誰一人、革命なんか望んじやいない。幹部のヤツら、そのことに気づこうとしないんだ。

万里
……………瀬川さん変わった。

瀬川
そんな眼で見るなよ。

万里
私の知ってる瀬川さんはそんな人じゃなかった。いつでも理想に燃えて闘い続ける人だった。俺たちが世の中を外から変え、組織を内側から変えてみせようじゃないか。私にそう云ってた……………！

瀬川
なあ万里、金貸してくれないか。

万里
……………。

瀬川
俺、もう戻れないんだよ。組織に戻ったって総括しろ、自己批判しろ、俺を待ってるのはそれだけだ。だけどさ、どこ逃げるにしたって金がな
いんだよ。

万里
……………帰ってください。

瀬川 ……そりやそうだよなあ。(煙草を取り出す)

万里 煙草はやめて。ここは学校なの。

瀬川 (煙草をくわえるが火はつけず) おまえさあ、高校教師になって満足してるか？ 張りのある毎日を送れてるか？

万里 ……帰ってください。

瀬川 どうなんだ？

万里 瀬川さんには関係ない。

瀬川 なあ、俺といっしよに俺の田舎に行って農業やらないか？ 土地ならあるんだ。畑耕すところから俺たちほんとの革命を始めないか？

万里 ……そんな話、聞きたくない。

瀬川 俺、ずっとおまえに惚れてたんだぞ。

万里 そんな話、聞きたくない。

瀬川 ……。

万里 今の瀬川さんは醜い。

瀬川 ……知ってるよ。

万里 ……。

瀬川 こんなに醜くなって、何やってたんだろうな、俺たち。

万里 なんでそんなこと云うのよ。そんな瀬川さんじゃない。私に総括要求してよ！ 私に自己批判しろって云ってよ！ 私を気がすむまで殴っ

てよ！ 殴りなさいよ！

云いながら万里、瀬川に掴みかかっている。瀬川、万里を押しつけようと万里の腕をつかんだ格好になり、そこへ幸一郎、続いて坂口が入ってくる。

幸一郎 万里……！

坂口 万里ちゃんッ！

万里 ……。(慌てて瀬川から離れる)

坂口 おまえ、何しとるんだ。(万里に)大丈夫か万里ちゃん、何かされたんかッ。

万里 大きな声出さないで。

坂口 万里ちゃんに何したッ？

万里 坂口君、何でもないから。

幸一郎 その男は誰だ。

万里 ……知り合いです。

幸一郎 どういう知り合いだ。

瀬川 昔の知り合いですよ。

幸一郎 「アカ」の知り合いか？

万里 お父さん、この人は関係ない。

幸一郎 万里に何の用があつて来た。

瀬川 お恥ずかしいんですけどね、昔のよしみで金を借りに来たんですよ。

坂口 ふざけるなッ。

万里 瀬川さん、帰つて。

幸一郎 万里、東京でのことはきっぱり忘れたんだな？

万里 え……？

幸一郎 この男とおまえは何でもないんだな？

万里 ……。

幸一郎 なんで黙つとる？ この男とおまえは何の関係もない。全共闘も松江相銀の事件も一切関係ないんだな？

瀬川 銀行襲いましたよ、松江相銀。失敗しちやつたけど。

幸一郎 ……！！

瀬川 でも心配しなくても娘さんは関係ないですよ。この女、からつきし意気地がないんですよ、昔っから。自分の信念も、仲間も、何もかもほっぽりだして田舎に逃げ帰った女ですからね。何にもできやしませんよ。

坂口 黙れッ。おまえに万里ちゃんの何がわかる……！！

瀬川 喚くなよ、これは俺と万里の問題だ。

坂口 (掴みかかり) おまえは何だ。突然現われて何だつていうんだ。おまえみたいななんがおるけん、万里ちゃんは幸せになれんだ。

坂口、瀬川を思い切り突き飛ばす。瀬川、床に倒れる。

万里 坂口君、やめて。

坂口 なんでだ万里ちゃん、なんでこの男の肩を持つんだ？

瀬川 見ただろ万里。(ゆっくりと立ち上がり)馬鹿な奴ほどすぐに暴力に訴える。力で解決できるって思うんだよ。

坂口 黙れ、黙れッ。

瀬川 おまえはその怒りを世の中に向けたことはあるのか？この腐った世の中に疑問を持ったことはあるのか？あるわけないよな。毎日毎日ただのうのうと生きてるだけで精いっぱいだもんな。

幸一郎 おまえたちがやったことは正しいのか？

瀬川 ……。

幸一郎 銀行を襲って他人様(ひとさま)の金を盗む。人を恐怖に陥れる。そんなことが許される大義名分がどこにある。

瀬川 ……。

幸一郎 君らがやったことは、ただの犯罪だ。君の親は泣くぞ。せっかく一流の大学に入ったのに、息子がただの犯罪者になるんだ。悲しむぞ。

瀬川 ……。

坂口 警察に電話してくる。

幸一郎 待て。…………。(財布を出して瀬川の足下に投げる)

坂口 先生…………。

幸一郎 どれだけの金が必要なのか、何に使うのか知らないが、一度ご両親に会って、それから自首しなさい。これ以上、罪を重ねるんじゃない。

音楽室のドアのすぐ外に金子、いつしか立って聞き耳を立てている。

瀬川 あんた、偉いんだな。

幸一郎 何…………？

瀬川 万里。

万里 え…………？

瀬川 思い出したよ。おまえが俺たちの闘争に加わったのは、父親が嫌いだったから、それも理由の一つだったな。いつも人を見下して、常に自分が正しくて、そのくせ自分は何も変えようとしな。そんな父親の存在が今の権力の在り方にそっくりだって、そう云ってたよな。

坂口 いい加減にしろ。さっさと出てけッ。

瀬川 今こそ総括しろよ、万里。

坂口 万里ちゃん、なんでこの男に出て行って云わないんだ。

瀬川 万里、おまえが毛嫌いしてた父親の前で、おまえが何をしてきたのか
自己批判して、総括しろよ。

幸一郎 云わんでもいい。

坂口 この男が好きなのか？ 万里ちゃんの内心中にはこの男がいるのか？

瀬川 ぎやあぎやあぎやあぎやあうるさいな、おまえは。

坂口 出てけッ……！ (瀬川を掴んでドアのほうに引っぱっていかうとする)

瀬川 (その腕を振り払い) まだ終わってないんだよ。

坂口 黙れッ！ (なおも掴みかかる)

瀬川 (振り払い) 邪魔するなッ！

坂口 黙れっ！ (なおも掴みかかる)

瀬川 (坂口を突き飛ばし万里に) 総括しろッ！

突き飛ばされた坂口、机や椅子を蹴散らして転がる。

万里 もうやめてッ。

坂口 (椅子の一つを振り上げ、瀬川に投げつけようと)

万里 坂口君、お願い、お願いだからッ……！！

坂口 ……。(荒い息づかいのまま椅子を下ろす)

瀬川 総括しろよ。

幸一郎 云わんでもいい。

万里 人が燃えたの。私のすぐ目の前で。

幸一郎 ……。

万里 機動隊員だった。火炎瓶をぶつけられて、火だるまになって、転げ回って、電柱にぶつかって、そのまま獣みたいなもの凄い声で叫びながら何度も自分で電柱に頭を打ちつけてた。私は動けなかった。ゲバ棒を持ったまま足がすくんで動けなかった。突然、誰かが私に体当たりしてきた。驚いて振り返ると、その人、顔中血だらけだった。血だらけの顔で私のこと睨みつけてた。機動隊員じゃなかった。でもヘルメットもかぶってなかった。そのときわかったわ。投げた石が一般の人にも当たったんだなって。

幸一郎 おまえも石を投げたのか。

万里 投げたわ。石も火炎瓶も辺り構わず投げたわ。

幸一郎 ……。

坂口 ……。

瀬川 みんな投げたんだ。何かを変えたくて。何かが変わると信じて。

万里 機動隊からは放水を浴びせられた。

瀬川 それでも俺たちはひるまなかった。

万里 催涙ガスも飛んできた。

瀬川 もうもうとした白煙にあちこちが包まれた。

万里 まるで戦場にいるみたいだって思いながら、誰かの叫び声を私は聞いた。

瀬川 突入だ！ 全員、機動隊に突っ込め！ 全員一丸となって突き進むんだッ！

どこからともなく革命を夢見る若者たちが突入してくる。

ヘルメットをかぶり、ゲバ棒を突き上げ、雄叫びをあげながら突き進んでくる。

白煙がもうもうと立ちこめる。怒号が飛び交う。肉を打つ音が響く。

傷つきながらも若者たち、なおも叫びながら突き進み、その姿は遠のいていく……。

瀬川 ……そのときおまえは何してた。

万里 何もしていなかった。

瀬川 どこにいた。

万里 走り出していた、みんなとは反対方向に。

瀬川 逃げたんだろ！

万里 逃げました。

瀬川　なんで逃げた？一般人を巻き添えにして傷つけるのが罪だと思ったからか？

万里　違います。

瀬川　じゃなんで逃げた？

万里　怖かった……。ただただ怖くなって、私は逃げ出した。

瀬川　おまえは卑怯者だ。

万里　私は卑怯者です。私は裏切り者です。恥知らずです。

坂口　もういいよ、万里ちゃん……！

瀬川　（幸一郎に）お父さん、あんたの娘、こんな女になっちまったよ、あんたのせいで。

幸一郎　……………。

瀬川　偉そうに説教ばかり垂れるヤツに育てられると、使い物にならねえんだ。肝心なときに逃げやがる。我が身大事、保身に走るんだよ。

幸一郎　（財布を拾い上げて突き出す）……………。

瀬川　（鼻で笑い）何のつもりだよ。

幸一郎　金が要るんだろ。持って行きなさい。

瀬川　……………。

幸一郎　私は逃げた万里を褒める。たとえ保身に走ったんだとしても、血が流れる現場から、暴力で何かを成し遂げようとする現場から一目散に逃げ

出した万里を私は誇りに思う。卑怯者で結構だ。万里は間違っていない。だから私も間違っていない。

瀬川 ……。

幸一郎 さ、この金を使いなさい。

金子、入り口に姿を見せる。

金子 先生、やめてください。お金なんか渡す必要ありません。今警察を呼びました。

一同 ……！！

金子 (ドアの外に出て叫ぶ) 北島先生、侵入者はこっちです、音楽室です！(瀬川に) 警察、もう来るわよ。

瀬川、一瞬の後、突然、幸一郎の財布を奪って窓に向かう。

坂口 待てッ！

万里 瀬川さん……！！

坂口 この野郎、返せッ！

瀬川 (坂口を突き飛ばして窓の外に出て) じゃあな、万里。(いなくなる)

坂口 卑怯者はおまえだろツ、待てツ！（なおも追おうと）

幸一郎 坂口、もういい。

坂口 だって、だって――

金子 坂口君。

坂口 え……？

金子 今、見たわよね、万里さんも。角森先生がお金を渡したんじゃない。

あの男が財布を奪って逃げたのよ。

幸一郎 ……。

金子 お金を渡せば犯罪を幫助したってことになりかねません。あんな男のために先生が手を汚すことはないんです。

幸一郎 ……。

万里 金子先生、警察は……？

金子 嘘よ。それとも通報したほうがよかった？

万里 ……。

幸一郎、ふいに万里の前に行って面と向かい、万里の頬を打つ。

坂口 先生……！

幸一郎 おまえが俺を毛嫌いしとるのは構わん。だがな、だからっておまえが

やってきたことが正しいとは少しも思わん。

万里
……………。

幸一郎 俺を憎んでるんなら、おまえが刃向かうべき相手はこの私だ。あんな連中といっしょになって誰彼構わずに火炎瓶を投げることじゃない。

万里 お父さんはいつだって正しいのよ。そして自分が正しいと思ったことは、ほかの人にとっても正しいんだって信じてる。押しつけられるほうはたまったもんじゃないわ。

金子 そんなこと云うもんじゃないわ。

万里 金子先生には関係ないことです。

幸一郎 ずっと、そう思ってたんか？

万里 思ってたわ。

幸一郎 おまえはずっと、父さんの考えを押しつけられと思うとったんか？

万里 思ってた。そういうの傲慢っていうんじゃないの？

金子 あなた誰に向かって云ってるかわかっているの、父親でしよう？

万里 父親がいない人は黙っててください。

金子 ……………。

幸一郎 (誰に云うともなく) 万里は子どもときから一度も心配かけたことがなくってな、反抗期なんて全然なくて、ほんとに聞き分けのいい子で、親

としちやそれを自慢に思つとつた。

万里
……………。

幸一郎
勘違いだったな。

万里
私は私なの。お父さんとは違う。

幸一郎
……………。金子先生。

金子
はい……………。

幸一郎
お金のこと、気を遣わせてすまなかつた。

金子
いえ……………。

幸一郎、ふいに立ち上がつて、出ていこうと——。

坂口
先生、俺、万里ちゃんと結婚します。

幸一郎
（足が止まり、振り返つて）……………何云つとるんだ、おまえは。

坂口
本気です。万里ちゃんを幸せにします。

幸一郎、何も云わず、足早に出ていく。

坂口
先生……………。（と一瞬、躊躇するが、後を追おうと）

万里
（呼び止めて）坂口君。

坂口 え？

万里 ……ごめんね。

坂口 え？ なんて謝るんだ？

万里 ごめん。

坂口 ……。

ややあつて坂口、幸一郎を追って出ていく。

万里 ……ご迷惑かけてすみませんでした。

金子 いいお父さんじゃない。逃げ出した万里を私は誇りに思う。万里は間違っていない。

万里 出まかせ云っただけです。

金子 私もそう思う。でもね、娘を庇うために心にもない出まかせだって平気で口にできる。そんな角森先生の気持ち、考えたことある？

万里 私を庇うためじゃありません。あの場を丸く収めたかっただけです。

金子 ……。

万里 ただの、事なかれ主義です。

金子 ……。

万里 失礼します。（出ていこうと）

金子 待ちなさい。

万里 ……。(足が止まる)

金子 明日の開会式での演奏が終わったら、あなたはもう吹奏楽部の仕事しなくていいから。

万里 (驚いて) どうしてですか？

金子 あなたは教育というものがわかってない。教育はね、「ごっこ」じゃないの。

万里 ごっこ……？

金子 学生運動だって、あなたにとっては革命ごっこだったのよ。

万里 違います。

金子 ごっこだったから途中で逃げ出せた。

万里 ……。

金子 あなた、私があなたのことを代員教師にすぎないと思ってるんじゃないかって、私にそう聞いたわね。

万里 ……。

金子 そう思ってるのは私じゃなくてあなたよ。いつでもやめられると思ってる。

万里 そんなこと思ってません。

金子 私はね、教師にならずと闘ってきた。怖くなったからって、嫌に

なったからって、学校という現場は逃げ出せないの。どんなに理不尽なことが降りかかってきても闘い続けなきゃならないの。

万里 ……先生の云う闘いって、生徒の気持ちを押し潰すことですか？

金子 ……

万里 金子先生は私の父にそっくりです。

金子 ……

万里 事なかれ主義で傲慢です。

金子 それでも私は逃げたりしない。

万里 ……

金子 あなたはその窓から逃げ出した男と同じ。あの男と同じように今も逃げ続けてる。全共闘から。過去の自分から。今の自分と向き合うことから。

万里 ……失礼します。（行こうと）

金子 （その背に）逃げてることを認めないと何も始まらないわよ。

万里、構わずに出ていく。

ふいに金子の頭の中を千匹の蜂が飛ぶ。

金子、頭を押さえてその激しい羽音をじっと耐えている。

「4」

翌日・2月19日（土）夜・大山国体開会式の前日・浅間山荘事件

発生

音楽室には誰もいない。『ハチのムサシは死んだのさ』が流れている。そこへ金子、幸一郎を伴ってドアから入ってくる。幸一郎は手に紙袋。

幸一郎 明日の朝、坂口が車出すようなことを云ったけど。

金子 大きな楽器だけ青年団の人たちに運んでもらうように頼んだんです。

幸一郎 はりきりやがって（紙袋からビールを取り出す）。

金子 一生懸命なんですよ。万里さんのために。

幸一郎 （苦笑して）部員たちはみんないっしょにバスか。

金子 ええ。先生もごいっしょにどうですか？

と云いながら、金子、音楽準備室の中に行く。

幸一郎 俺は自分で行くけん。

金子の声　　そうですか。

幸一郎　　あんたこんな曲聞くんか？

金子の声　　ラジオですよ。さっきまで天気予報聞いてたんです。

幸一郎　　レコード買ったんかと思つて。

金子の声　　まさか。

幸一郎　　（少し笑つた）。

金子の声　　今晚から雪になるんですつて。

金子、グラスと菓子折の箱を持って出てきて――。

幸一郎　　すまん、無理に誘つて。

金子　　いいえ。

幸一郎　　あんたとちよつと前祝いしたんなつてな。これだけ飲んだら帰るけん。

金子　　いいんですよ。あ、それおかきなんですけど、おつまみになりますか？

（グラスなど置き、ラジオのスイッチを切る）

幸一郎　　あんたのおやつか。

金子　　吉野君のお母さんの差し入れですよ。

幸一郎　　吉野つて、ああ、トランペットの。

金子　　ええ。

幸一郎 そういや、あいつは何かあったんか？ 練習はどっか上の空だし、一昨日は学校までサボっとったって聞いたが。

金子 私も気になってたんで今日直接呼んで云ったんです。一人でも集中してない部員がいると全体の音が乱れるって、そういうの音に出るのよって。

幸一郎 そしたら？

金子 大丈夫です、明日はちゃんとやりますって、へらへら笑ってました。

幸一郎 だったらいいが。（金子にビールを注ごうと）

金子 あ、すみません。（注いでもらいつつ）それでお母さんのほうはしょっちゅう差し入れを持ってくるでしょう、なんだか決まりが悪くて。

幸一郎 それだけ部活を応援してくれてるんだよ。

金子 でも結局は、うちの子どもの面倒見てやってください、最良してやってくださいねっていう「付け届け」でしょう？

幸一郎 そう云われりや身も蓋もないが、親心だよ。

金子 気持ちには分かるけど、教師がそんなことで手心加えたりすると思ってるんですかね。教師失格でしょう？ 私、そのうちお金を渡されるんじゃないかって内心冷や冷やしてるんです。

幸一郎 それを云われると耳が痛いな。

金子 え、どうしてですか？

幸一郎 私も昨日、万里のことで金を渡そうとした。

金子 それは全然違いますよ。

幸一郎 ……ん。

金子 あんなふう云ってくれる父親がいたら、私は嬉しいわ。(ビールを飲む)

幸一郎 ……あの男、まだ逃げ回つとるんかな。

金子 逮捕されたっていうニュース、聞きませんよね。

幸一郎 (ビールをぐいっと飲み)万里にあんたの爪の垢でも煎じて飲ませたいよ。

金子 またそんな。

幸一郎 いやいやほんとに。

金子 (幸一郎にビールを注ぎつつ)私は万里さんが羨ましいですよ、あの若さが。

幸一郎 若いつてことは、それだけ未熟だってことだよ。

金子 若い教師っていうだけで生徒は慕ってくれます。

幸一郎 そういう生徒もおるけど。

金子 ときどき私、無性に腹が立つんです。そんなことに腹を立ててる自分に。

幸一郎 気にすることはない。

金子 気にしたって若い頃に戻れるわけじゃないんですけどね。(ビールを飲

む)

幸一郎 教師が生徒と友だちになる必要はないよ。大事なのは生徒たちをまとめて引っぱっていく力だ。金子先生の統率力がなかったら、吹奏楽部はここまで上達しとらんよ。吹奏楽部が明日の開会式で演奏できるのも、あんたが優秀な教師だっていう何よりの証拠だよ。

金子 先生だけです、そんなこと云ってくださるの。

幸一郎 そんなことはない。あんたはようやつとるよ。みんなそう思つとる。

金子 先生、もう一杯飲んでもいいですか。

幸一郎 (金子にビールを注ぎつつ) 生徒だってあんたを信頼しとる。

金子 (陽気に) ありがとうございます。

ふいに佐和子が現れて、金子を睨みつけて云い放つ。

佐和子 **先生は卑怯です。**

金子 ……。(驚いて目を奪われている)

幸一郎 吉野も先生に声をかけてもらって明日は張り切って演奏するんじゃないか。

金子 ……え？

幸一郎 吉野。吉野健。

金子 ああ……。

幸一郎 (窓を見て) お、降ってきたよ雪。

金子 天気予報当たりましたね。

窓の外、雪が降り出している。

金子、窓に視線を移すと、ふいに瀬川が現れて――。

瀬川 偉そうに人に説教ばかり垂れる奴に育てられると、使い物にならねんだ。

金子 ……。(驚いて目を奪われている)

幸一郎 雪が足りないって役場の人間が心配しとったが、これでひと安心だな。

佐和子 なんで北島先生は集会のこと知ってたんですか？

幸一郎 じゃそろそろお開きにするか、明日の演奏に備えて。

瀬川 肝心なときに逃げやがる。保身に走るんだよ。

幸一郎 積もる前に帰らんな。

佐和子 先生が云いつけたんでしょ？

金子 先生、ちよつと変なことお願いしていいですか？

幸一郎 なんだ？

金子 私の耳の中を見てほしいんです。

幸一郎 耳の中……？

金子 何か変なものが入ってませんか？（と傍に寄って耳を幸一郎に向ける）

幸一郎 （訝りながらも覗こうとしつつ）変なもの……？

金子 ……。

幸一郎 （覗きつつ）いや、どうもなつとらんよ。

金子 （首の角度を変え）奥のほうです。何かいませんか？

幸一郎 （覗きつつ）暗くてよう見えんけど……。ちっちゃい羽虫でも入ったんか？

金子 羽虫じゃなくて、蜂、いませんか？

幸一郎 （驚いて）ハチ？ 蜂ってあの一——

金子 ええ、あのミツバチとかスズメバチとかの。

幸一郎 おらんよ。（離れて）蜂なんか入り込んだらじつとしとられんだろ。

金子 そうですよ。

幸一郎 耳は音楽やるモンには命だけん、大事にしてもらわんといけんけど、耳の中がなんかおかしいんか？

金子 気のせいですね。どうもすみませんでした。

ふいにどこからか万里が現れて、金子に云い放つ。

万里 反対意見を持つ人間に何もさせない、何も云わせないっていうのはフェ
アじゃないと思うんです。

幸一郎 ……大丈夫か？

金子 去年の夏休みに、私の教え子が顔見せに来たんです、学校に。

幸一郎 うん……。

金子 看護婦になって今は精神病院に勤めてるんですけど、そのときその子
から珍しい患者さんの話を聞いたんです。大手電機メーカーの課長さん
なんですけど、その人、診察室に入るなり云ったんですって。「先生、
なんとかしてください。頭の中に蜂が千匹棲みついとるんです」

佐和子 先生は卑怯です。

幸一郎 棲みついとるって、自分の頭の中に？

金子 そう云い張って聞かないもんだから、奥さんが連れて来たみたいで。

幸一郎 そりゃ奥さんもびっくりしなっただろうな。

金子 ええ、だって本当に蜂が棲みついてるわけじゃないじゃないですか。

ふいにどこからか吉野が現れて――。

吉野 先生にはほんとに感謝しとるんです。あげな子をよう見捨てんでここま
で指導してくださって。

幸一郎 でもその人、なんで頭ん中に千匹も蜂がおるってわかるんだ？

金子 もの凄い数の蜂がいつせいに羽音立てて鳴り響くんですよ――、

佐和子 私は未熟、考えが未熟。行動が未熟。百万回聞かされました。

金子 頭が割れそうなくらい。

瀬川 いったも人を見下して、常に自分が正しくて。

金子 病院の先生たちは前例なんかないケースだから手を焼いて――、

瀬川 そのくせ自分は何も変えようとしなない。

金子 でもなんとかしなきゃって診察を続けたんですけど――、

万里 教師が生徒のことをそんなふう云っていいんですか？

金子 少しもよくなならない。千匹の蜂は頭の中でますますもの凄い音を立てながら飛び回って――、

佐和子 先生は私が先生の思い通りにならないから、それが気に入らないだけ。

幸一郎 まあ本人がそう思い込んでるんだけん、手の施しようがないわなあ。

金子 それである日、私の教え子がその人に云ったんです。「その蜂、耳の穴から一匹ずつ、つまみ出しちやいましょうか」って。ピンセットで。

幸一郎 つまみ出す？ 蜂を？

吉野 先生がそう云いなるんなら搜索願はもうちょっと待ってみます。警察沙汰にならんですむんならそれがいいですもんね？

金子 もちろん蜂なんか出てこないんですけど、毎日いい歳した男の人を膝

枕してあげて云うんですって。

万里 先生の云う鬩いって、生徒の気持ちを押し潰すことですか？

金子 「今日は気分はどうですか？ 蜂は出てきそうですか？」

佐和子 意見を云えば、それは煽ってるってことになるんですか？

金子 「あら今日は奥にちっちゃいのがいますよ。捕っちゃいましょうね」

佐和子 考えを主張すれば、それは政治活動ってことになるんですか？

金子 「課長さん、今日も一匹蜂が出てきました。捕れましたよ」

万里 欺瞞です。自己批判すべきです。

金子 毎日毎日、蜂を捕り続けたんです。

佐和子 自己批判してください。総括してください。

幸一郎 それでどうなった？ 患者さん、少しはようになったんか？

金子 ええ……。頭の中の蜂を毎日毎日捕ってあげてるうちに、少しずつ蜂に苛まれることはなくなっていくってー。

佐和子、万里、瀬川、吉野、どこへともなく消えていく……。

金子 人間っておもしろいですね。……蜂なんているわけないのに。

幸一郎、ビールを飲み干し、天井を見上げて蛍光灯の真下に椅子を置く。

幸一郎 金子先生、ちよつとこつち。

幸一郎、その椅子に座るよう金子を促す。

金子 え？

幸一郎 いいからこつち。

金子 はい。

金子、戸惑いつつ、その椅子に座る。

幸一郎、その横にもう一脚椅子を持ってきて座り、金子の体を倒して膝枕をする体勢をとる。それから光の届き具合を気にしつつ金子の耳の奥を覗く。

幸一郎 ここだと電気の下だからな。耳の奥まで結構見える。

金子 ……。

幸一郎 あんた、いい耳しとる。きれいな耳だ。こんなきれいな耳には蜂も羽虫も一匹も…あ、いた、おつた。

金子 え……？

幸一郎 虫が一匹、でもこれは蜂じゃないな。……ああこりややつかいなあいつだ。耳ん中でがんばれ、がんばれがな。……あんなに悪い虫じゃないんだがな、あんまりうるさくされるのも困るけん、今日は捕っとくか。あ、動かんで。今捕るけん。……毎日毎日、生徒と向き合って、父兄と向き合い、ほかの教師と向き合い、教育委員会と向き合い。それなのに人の苦勞も知らんで、がんばれ、がんばれって云うけん、こいつは。

金子 ……。(泣きそうになっている)

幸一郎 もうちよい、もうちよつとで……よし、捕れた。これでもう大丈夫。

金子 ……。(体を起こす)

幸一郎 あんたの頭の中には蜂なんか棲んどらん。絶対に、棲んどらん。

金子 ありがとうございます(頭を下げる)。

幸一郎 (微笑んで)……。

金子 ……先生は在職中に教師を辞めようと思ったことありますか？

幸一郎 辞めたい、じゃなくて、辞めよう、と思ったことか？

金子 ええ。

幸一郎 (少し笑って) 数え切れんぐらいそう思った。

金子 ……でもそうしなかった。

幸一郎 金子先生、辞めたらつまらんよ。

金子
……………。

幸一郎 今だけん云ええけど、俺は在職中一回も辞めようと口にしたことはない。口にすると、そうせんといけんような気になる。もう教師は辞めよう、数え切れんほどそげ思ったが、それより一回だけ多く辞めるのを止めようと思えば、それでいいんだ。

そこへ万里、帰り支度をすませた格好で現れる。

幸一郎 なんだ、帰ったんじゃないのか？

万里 職員室でニュースを見ました。

幸一郎 ニュース？

万里 軽井沢の山荘に過激派の連合赤軍が人質をとって立て籠もったんです。

幸一郎 ……。

万里 包囲している機動隊にライフル銃で発砲してるそうです。

幸一郎 なんでそれを云いに来た。それが革命だとも云いたいんか。

万里 お父さんの云うとおり、あの人たちは間違ってる。あんなの革命でも何でもない。でもそんな偉そうなものじゃなくていいけど、何かを変えなきゃいけないって思ったのには、何かおかしい感じがきつと、間違いなくそこにはあるのよ。何かをおかしいと思う。何かを疑わしいと思う。

私、その出発点だけは間違ってたなかつたと思う。私は東京でそれだけは学んだの。

幸一郎 ……おまえはずっと俺のことを、何かがおかしい、何かが間違ってる

つて、そう思ってたって云いたいんか。

万里 お父さん、そういちいち自分に結びつけて考えないで。

幸一郎 でもそういうことだろう？

万里 ……。(ややあって突然出ていこうと)

金子 万里先生、明日のことだけ——。

万里 わかっています。楽器の運搬には私が立ち合いますから、金子先生は部員と同じ集合時間までに来てくだされば結構です。

金子 ……お願いするわね。

万里 失礼します。

金子 昨日の男は立て籠もってないの？

万里 ……。

金子 全共闘もなれの果てってことでしょ？ あの男だって何しでかすか——。

万里 (ややあって) 私たちは連合赤軍じゃなかったの。

金子 そう。そういうもの。

万里 全共闘の中にもいろんな考え方のセクトがあるんですよ。それこそ学

校にはいろんな生徒がいるように。決して十把一絡げじゃありません。

万里、出ていく。

5

翌日・1972年2月20日（日）・早朝・大山国体開会式当日

誰もいない音楽室。窓の外では薄明の空から雪が降っている。

そこへ坂口が顔を出してざっと室内を見回し、音楽準備室に向かって――。

坂口

吉野君まだ連絡ないん？ まだどこ行つとるかかわからんのか？

準備室から箒とちり取りを手にした万里、持って出てきて、首を横に振る――。

坂口

何やつとるん、こんな大事な日に。どこで油売つとるんかな。

万里

たぶん、来ない。（床を箒で掃き始める）

坂口

なんで？

万里

わからないけど吉野君、来ないと思う。

坂口

……。

万里

だからもう出発して。どっちにしても楽器がないと話にならないから。

坂口 吉野君おらんでも演奏は問題ないんか？

万里 大丈夫よ。金子先生がそんなことでへまをすと思う？

坂口 そうか、そうだな。(ややあって) 積み残しは……

万里 必要な楽器は全部積んだ。

坂口 積んだな。じゃ行ってくるけん。

万里 (手を止め) 坂口君。

坂口 え……？

万里 ごめんね、朝早くから。

坂口 いや。全然。俺、万里ちゃんの応援団だけん。

万里 (困惑気味に) 応援団？

坂口 頼りないかもしれないけど、万里ちゃんがこっちにいる限り、俺は万里

ちゃんの応援団長、そう決めたけん。迷惑？

万里 そんなことないよ。

坂口 ……。

万里 全然そんなことない。

坂口 今朝俺、家出る直前までずっとニュース見とった、あさま山荘の。警

察は朝の六時から拡声器使って説得しとったけど、やつら何も云わんと
ライフルぶっぱなすばかりで。

万里 ……。

坂口 ああやって立て籠もって、世の中に刃向かって、ライフル撃って、あ

いつらはいったい何がしたいんだ？ 万里ちゃんはいつらの気持ち
分かるんか？ 少しは気持ち分かるんか？

………。

坂口 あいつらは田圃の一つも耕したことないんやろ？ 世の中変えような

んて偉そうに云つとる暇があったら汗流して、土耕して……

万里 私はもう関係ないから。

坂口 ……うん。

万里 この前来た人、瀬川さん、あの人も関係ないから。

坂口 うん……。

そこへ金子、姿を見せて――。

金子 坂口君、そろそろ行ってもらわないと。

坂口 あ、すみません、今……

金子 もお鉄砲玉なんだから。積み残しがないか確認してきてって云っただ
けなのに。

万里 積み忘れはありません。確認しました。

坂口 ほんなら万里ちゃん。

万里 うん、運転気をつけて。

坂口 (振り返って) 金子先生は？ 部員たちのバスもいっしょに出るんですよ

ね？

金子 バスはもう出発させたわ。私はぎりぎりまで待ってみるから。

坂口 吉野君を？

金子 ほかに誰を待って云うの？

坂口 じゃ先に行ってます。

坂口、急いで出て行く。万里、再び床を掃き始める。

金子 もうダメね、吉野は。

万里 ……。(金子を見る)

金子 この状況で逃げ出すようじゃ何やってもダメよ、あの子は。(万里を見て) 万里先生、何か聞いてなかったの？

万里 ……いえ何も。

金子 自信がないなら最初からそう云えばいいのよ。いきなりすっぱかすなんて。開会式での演奏を何だと思ってるのよ。(大きな溜め息をついて腕時計を見て) あと十分待って来なかったら私も行くから。

万里 あの、演奏のことより吉野君のことを心配すべきなんじゃないですか。

金子 してるじゃない。

万里 先生が心配してるのは演奏がうまくいくかどうか、それだけでしょう？

金子 秤にかけること？ それを云うなら責任感の問題でしょう。

万里 責任感……？

金子 開会式で演奏することを引き上げた以上、私にはそれを成功させる責任があるの。吉野がすっぱかしたってことになれば、ほかの部員だって動揺するの。それでも私はなんとかしなくちゃならないの。

万里 ……。(ややあって床を掃き始める)

金子 掃除なんてしなくていいから。

万里 ……。(掃いている)

金子 聞こえた？

万里 吉野君、時間通りに家は出てるんですよ、もしかしたら――

金子 吉野のことも私は心配してるわよ。だから部員たちを先に行かせて、こうしてぎりぎりまで待とうとしてるの。何が気に入らないの？

万里 ……。(掃き始める)

金子 身も蓋もなく云うけど――。

万里 (手を休めず) 何ですか？

金子 前田先生が戻ってくれば、あなたは用済みってことになる。もし前田

先生の休職が続いたとしても新学期からは正式な教員が新しく配属される可能性が高い。だからどっちにしても……

万里 私が教師でいられるのはあと一ヶ月ちよつとです。

金子 つまりあなたは腰掛けでしょう？

万里 ……。（手を止めて金子を見る）

金子 あなたは臨時の代員教師だから、あなたには何の責任もないから、吉野がどうのこうのってそんな安っぽいヒューマニズムに浸ってられるのよ。

万里 ……。（掃き始める）

金子 私はあなたと違って来年も再来年もその先も、ずっと教師をやっていくの。やっていかなくちゃならないの。掃除なんてしなくていいッ。

万里 （掃くのをやめず）……ずっと教師をやり続ければ、先生のような考え方になるんですか？

金子 試せるものなら試してみれば。あなたは学校というものがわかってない。

万里 私の父が働きかけるかもしれないよ。

金子 働きかける……？

万里 教育委員会に。私がこの学校にまだいられるように。

金子 あなた、そんなことを承知する人じゃないでしょう？ 承知する？

万里 （手を止めて金子を見て） しません。

そこへ佐和子、軍手をはめた右手に紙袋を提げて現れる。

万里 木村さん……。

佐和子、有無を云わせぬ態度で机を運んできてドアの前に置く。

金子 何？ どうしたの？

佐和子 （なおも机を運びつつ） すぐ終わります。

万里 木村さん、あなた……

金子 何なの？ あなた、何やってるの。

佐和子 バリケードです。

金子 バリケード……？

佐和子 今から私、ここに立て籠もります、金子先生は人質です。先生を国体会場に行かせるわけにはいきません。

金子 何バカなこと云ってるの。

佐和子 （机の前に立ち） 本気です。

金子 机を戻しなさい。

佐和子 (手提げから瓶を取り出して見せ) 火炎瓶です。

万里 木村さん……！

金子 ……。

佐和子 本物です。中にガソリンと硫酸が入ってます。割れば化学反応で自動的に火がついて燃え上がります。

金子 バカバカしい。今度は何、一人ぼっちで過激派ごっこ？

佐和子 そうです。私は一人でも徹底抗戦します。

万里 木村さん、落ち着いて。

金子 くだらない、私は行くわよ。(行こうと)

佐和子 動かないで。それ以上動くとはんとに投げますよ。

金子 (ややあって) 投げられるもんなら投げなさい。(行こうと)

万里 (金子に駆け寄り、腕をとって引き留め) 本物なら大変なことになります。

金子 (その腕を振り払い) いい加減にして。ここはあさま山荘じゃないのよ。

万里 ……。

佐和子 私にとってはあさま山荘です。ここが最後の砦なんです。

万里 やめなさい、今ならまだ取り返しがつくわ。

佐和子 ごめん万里先生、開会式が終わるまで先生も出すわけにはいかない。

万里 こんなことしたって、結局あなたが傷つくのよ。

佐和子 私だってさんざん考えました。

金子 私を監禁すれば、それで演奏が中止になるとでも思ってるの？

佐和子 考えたけど、やっぱり金子先生のやり方は間違ってる。

万里 木村さん、金子先生に要求したいことがあるならきちんと言葉で云つて。

佐和子 言葉なんて無力です。

万里 そんなことない。人と人が理解し合うには言葉しかないのよ。

佐和子 何を云っても金子先生には通じなかった。

金子 いいわ、わかった。私が「総括」するわ。

佐和子 ……。

金子 あなた私に「自己批判しろ」って云ったじゃない。私が今から「総括」するから万里先生に聞いてもらって判断してもらいましょうよ。あなたの行動が「造反有理」なのかどうか。

金子、万里が持っていた箒を手にとって佐和子に突きつける。

金子 あなたが根に持ってるのはこれでしょ？

佐和子 ……。

金子 吹奏楽部員はほかの生徒より早く登校して、音楽室だけじゃなく、校門、玄関、中庭の掃除をする。それが気に入らなかつたんでしょう？

万里 （佐和子に） そうなの？

金子 それを私が提案したとき八人の部員が反対したの。あなたも反対の立場だった。

佐和子 一方的に押しつける、その決め方がおかしいって云ったんです。掃除が嫌だったわけじゃありません。

金子 どこに反対する理由があるの？ あなたも音楽を愛する人なら自分たちの環境を美しく保ちたいと思わないの？

佐和子 そんなこと個人個人が判断すればいいことです。

金子 集団でやり続けることが大切なのよ、吹奏楽と同じ。

佐和子 そんなのこじつけです。先生は点数稼ぎがしたかったんでしょ？

金子 部内は意見が分かれて険悪なムードになったわね。

佐和子 それで前田先生が新たに提案し直した。

金子 「部員各自の自主性に任せるってことでいいんじゃないか」

佐和子 次の日から朝早く掃除をする部員としない部員に分かれた。

金子 でも日が経つにつれて、反対派だった部員たちもだんだんと掃除をするようになった。

佐和子 なぜなら金子先生が裏で糸を引いたから。

金子 なぜなら集団行動の大切さを本人が理解したから、個人でね。どうしてそう悪意のある方に解釈するの？

佐和子 先生は私にも云った。「この先、あなた一人だけがやらないってことになったら、あなた部に居づらくなるわよ」

金子 あなたを思っただけで云ったのよ。

佐和子 脅しでしょう？

金子 いい加減に人と協調することを覚えてよ。吹奏楽は個人プレーじゃで
きないのよ。なのにあなたは私に脅されたって前田先生に云いつけた。
佐和子 何かがおかしいと思ったから。自主性に任せるって云いながら、どん
どん強制するムードができていってたから。

金子 前田先生はみんなの前で云ったわね。「掃除は強制じゃない。自主性
なんだから、やらない人間の権利も尊重すべきだろ、みんな」

万里 だけど結局、反対派は木村さん独りになった……。

佐和子 そしていつの間にか、私と前田先生の仲が普通じゃないってことにな
ってた。放課後二人きりで遅くまで残ってるのを見た、街を二人で歩い
てるどころ見た、音楽室でキスしてるところを見た。

金子 それはあなたと前田先生の問題でしょう。

佐和子 でも目撃者は一人もいなかった。放課後二人っきりの私たちを、街を
歩く私たちを、音楽室でキスする私たちを、一人一人に聞いて回ったけ
ど誰一人見た人はいなかった。当然よ。だってそんなことは一切なかっ
たんだから。

万里 金子先生が噂を流したんですか……？

金子 人聞きの悪いこと云わないで。知らないわよ、そんなこと。

佐和子 前田先生は部活を休むようになった。部活だけじゃなく学校も休むようになった。そしてとうとう学校に来なくなった。

金子 ……。

万里 金子先生はその件で前田先生と話はしたんですか？

佐和子 たいして問題にしなかった。

金子 プライベートでしょう、立ち入る必要がある？

佐和子 金子先生はわざとやり過ぎた。なぜなら前田先生がいなくなってくれたほうがいいと思ってたから。

金子 バカ云わないで。

佐和子 なぜなら前田先生のほうが部員に人気があったから。前田先生のほうが圧倒的に慕われてたから。

金子 (驚いて) ……そう。……あなたそんなふうに使ってたの？ 私が人気のある前田先生を嫉んで、あらぬ噂を流した。

佐和子 凶星でしょう？

金子 それが根も葉もない噂なんだったら、どうして前田先生は休んだの？
私は単なる噂だと思ってたわ。

佐和子 嘘……！

金子

前田先生が休みがちになれば、誰だってほんとだったんだって思うようになる。そうならもうどうしようもない。それが集団の怖さってもののなの。だから前田先生は意地でも休むべきじゃなかった。噂が本当だろうが嘘だろうが、休んだ時点で前田先生は教師として失格だったのよ。

佐和子

ひどい……。先生は前田先生を見捨てたんですよ、黙って、やり過ぎして。教師失格なのは金子先生です。

金子

じゃあ聞くけど、あなたはなぜ退部したの？

佐和子

……。

金子

なぜあなたは意地でも吹奏楽部を続けなかったの？

佐和子

続けたかった。意地でも続けてやるって思ってた。でも前田先生が休むようになって誰も私と音合わせをしてくれなくなった。だからずっと練習は独りだった。金子先生の云った通り、私は独りになって居づらくなった。それでもいいって思ってた。だけどみんなでいっしょに演奏すると、あ、今みんなと少しズレた、あ、またみんなと合っていない、そんなことばかりが気になって、だんだん何のためにフルートを吹いているのか自分でわからなくなった。

金子

……。

佐和子

先生は権力です。権力そのものです。権力にものを云わせて、部員一

人ひとりの自主性を排除し、前田先生を排除した。私を排除した。排除して私の一番大事なものを私から奪った。

金子 一番大事なものの？

佐和子 音楽！ 金子先生は私から音楽を奪った……！！

佐和子、いつしかその頬に涙が伝っている。

佐和子 ……フルートが吹けないの。吹いても心が弾まない。（胸を叩き）ここが、ここが石みたいに固くなって、何も感じない。苦しいだけなの。……。

金子 （ややあって）すべて考え方の違いだと思うわ。

万里 そんな。そんな云い方はないんじゃないですか。

金子 吹奏楽部に戻りなさい。そしたらまた吹けるようになるわ。

佐和子 今の吹奏楽部が奏でてるのは音楽じゃない。機械音です。部員一人一人が機械になることを強制されて金子先生の命令に従ってるだけ。私は戻りません。

金子 じゃそれでいいわ。（行こうと）

佐和子 動かないで……！！

金子 まだ何か云いたいことがあるの？

佐和子 どうして吉野君を捜しに行かせなかったんですか？

万里 吉野君を……？

佐和子 三日前、吉野君が学校に来なかった日、部員たちはみんなで捜そうつて云ったんですよ。でも先生は行かせなかった。

金子 本番直前よ、練習休めると思ってるの？

佐和子 それが先生の云う集団の大切さですか？「みんなのため」「集団が大事」、もっともらしいこと並べ立てて、生徒一人ひとりの考えは押し潰す。国体の開会式に独断で参加を決める。個人はどうでもいいんですか？

金子 辞めた部員が口出しすることじゃないわ。

佐和子 私たちは先生の云いなりになる駒じゃない。

金子 (ややあって) もういい？

佐和子 え……？

金子 くだらない愚痴はそれだけ？

佐和子 ——！(火炎瓶を振りあげる)

万里 ダメよ投げちゃ、投げたら負け。

佐和子 負け……？

万里 暴力じゃ何も変わらないのよ。人が傷ついて傷ついて絶望が残るだけ。

金子 よく聞きなさい、経験者が云ってるんだから。

万里 そんなことあなたに云われたくない。

金子 革命なんてね、現実に対応できない愚か者の――

万里 黙れ！（佐和子に）木村さん、あなたもう十分傷ついたじゃない。それ以上、傷つかなくていい。

佐和子 ……。

万里 もう十分じゃない。

佐和子 ……。（ゆっくりと火炎瓶を下ろす）

そこへ幸一郎、音楽室のドアの外から声を掛ける。

幸一郎 金子先生。万里。

一同 ……！

佐和子 しゃべらないで……！

幸一郎 おい、ドア開かないぞ、いないのか？ 金子先生？

金子 （ややあって声を張って）今開けます。

佐和子 ……！

金子 退学になる覚悟があるなら投げなさい。（ドアに向かう）

佐和子 ……！（火炎瓶を振りあげる）

万里 ……（その手を押さえにかかり）やめなさいっ。

佐和子 離して！

幸一郎 どうした？

万里 やめて！

佐和子 離して！

佐和子、万里を押しとばし、火炎瓶を金子に向けて振りあげる。

金子、恐怖に目を見開く。

万里 木村さん……！！

佐和子、金子の足下に火炎瓶を投げつける。床にガラスが砕け散る。

幸一郎、はっとして奥に去る。

ガラスが砕けた床、中の液体も飛び散っているが、炎はあがらずー。

佐和子 ただの水です。

金子 ……。(まだ恐怖におののいている)

万里 ……。(佐和子の前に進み出て佐和子の頬を打つ)

佐和子 ……。(万里をまっすぐ見る)

万里 あなたの気持ちは痛いほどよくわかる。でもね、闘いを挑むならもつ

と大きな相手にしなさい。

やがて窓の外、幸一郎が弾む息で姿を見せて――。

幸一郎 おい、どうした？ なんかもあったのか？

金子 ……。(急いで窓を開ける)

万里 なんでもない。ちよつとガラス瓶を割ってしまっただけ。(バリケードの机を戻し始める)

金子 わざわざ呼びに来てくれたんですか？

幸一郎 吉野健が車にはねられた。

佐和子・万里・金子 ……！

万里 無事なの？

幸一郎 詳しいことはわからん。吉野のお母さんところちに向かっとなら救急車が

停まって騒ぎになっとなって…。

佐和子 病院どこですか？

幸一郎 市民病院って云っとなった。

佐和子、脱兎の如く、机を押しつけ飛び出していく。

万里 木村さん——。

幸一郎 (金子に) 病院には行ってみるけん、金子先生は開会式に。

万里 開会式に行くんですか？

幸一郎 タクシー待たせてあるけん、急がんともう時間が。

万里 演奏はいざとなったら生徒たちだけでもできるでしょう、まずは吉野君のところへ行つて——

幸一郎 なに青臭いこと云つとる。責任があるんだ、金子先生には。それに……。

万里 それに？

幸一郎 吉野は事故じゃないかもしれん。

金子 ……どういふことですか？

幸一郎 何人かが見たって云つとつた、吉野が自分から突然車道に飛び出したつて。

万里 ……どうして。

幸一郎 とにかくまだ何もわからん。(促して) 金子先生。

金子 あとお願いします。

金子、弾かれたように出ていく。

幸一郎 おまえも病院にいっしょに來い。

万里 ……お父さんも金子先生の立場だったら開会式に行く？

幸一郎 当たり前だ。ほかの生徒たちだっておるんだぞ。

万里 そうよね……。お父さんと私は違うから。

幸一郎 一時いっときの感情に流されたら教師なんてやっとなんてやっとなん。

万里 だったら私には無理だわ。

幸一郎 ……。

万里 病院に行くわ。

云いながら万里、机を戻している。

6

同日・1972年2月20日（日）・午後・大山国体開会式終了後

雪は止み、冬の午後遅い陽射しが差し込む音楽室。

金子が箒で床を掃いている。傍らにちり取り。机の一つにはやや大きめの花束。

万里、コート姿で現れ、それを見た金子、思わず手を止めて――。

金子 どうだった？

万里 命に別状はないそうです。運ばれたのが早かったのも幸いしたって。もう意識もはっきり戻ったって。

金子 ……。（座る）

万里 私は直接会えませんでしたけど、お母さんに聞いたらちゃんと話もできるところになったって云ってました。

金子 ……わかった。

万里 後遺症なんかが残っちゃうのか、まだそういうこと全然わからないんですけど、時間はかかるでしょうね。

金子　　そう……。

万里　吉野君のこと、部員たちには？

金子　急に熱が出たって云つといたわ。みんな信じてないだろうけど。

万里　明日には事情を説明しないとイケませんね……。

金子　―――。（箸を置き、顔を覆うようにして息を吐く）

万里　先生……？

金子　（顔をあげ）よかった、助かって。

万里　ええ、ほんとに……。

金子　私のせいだと思ってるんでしょう？

万里　……。

金子　いいのよ。私もずっとそのこと考えてた。私のせいなんだろうなあつて。

万里　（ややあって）一時の感情に流されたら教師なんてやっていけない。

金子　……。

万里　父がそう云ってました。

金子　そう……。

万里　金子先生の立場だったら、迷わず父も開会式に行くって。

金子　……。（掃除を再開する）

万里　いいんですか、先生が掃除して。

金子 しょうがないでしょ。破片がまだ残ってたから。

万里 (ややあって) 演奏はうまくいったんですか？

金子 あれだけ練習したのよ。失敗するはずないでしょ。

万里 ……。

金子 生徒たちも肩の荷が下りたのね。晴れ晴れとした顔してたわ。

万里 (花束を手に取り) ……きれいですね。

金子 わざわざそんなものまで用意してくれて。それ、吉野に持ってたら受け取ってくれると思う？

万里 直接渡したらいいんじゃないですか。吉野君も今日の開会式、気持ちはいっしょに演奏してたんだからって。

金子 そんな調子のいいこと、よく即座に思いつくわね。

万里 ……。

金子 私ね、あの子たちの未熟さに共感してやることのできないの。未熟なあの子たちが未熟さゆえに苦しんでいるとき、いっしょになって苦しんでやることのできない。

万里 ……。

金子 吉野のことともそう。車に飛び込むなんて、こんな大事なときにバカじやないのっ！ そう思ってしまうの。

万里 そう考えないと教師は務まらないんでしょう？

金子

生徒に迎合することが教育じゃないでしょう？

坂口、窓の外に姿を見せる。万里、坂口に気づいて――。

万里

坂口君。

坂口

……。「よ」、と手を挙げる)

万里

(窓を開けて) どうしたの？

坂口

楽器持って帰ってきて幸一郎先生に電話したら、万里ちゃん学校行っ
たって云うから待った。

万里

いいのに、わざわざ。

坂口

大丈夫か？

万里

何が？

坂口

いや、大丈夫ならいいんだ。

万里

……。

金子

いいわよ万里先生、先に出て。あとは私がやっつくから。

坂口

いや急かしに来たわけじゃないけん。俺は今日は時間いっぱいあるし。

金子

いいのよ、送ってあげて。坂口君も今日はお疲れさま。助かったわ。

坂口

いつでもまたこき使ってください。

そこへ佐和子、朝とは別の紙袋を提げて現れて――。

佐和子 失礼します。

万里 木村さん……。

佐和子 金子先生、今いいですか？

金子 何の用？ 今度は本物を持ってきたの？

万里 (坂口に) ごめん、やっぱり先に帰ってて。

坂口 車んここで待つとるけん。あ、全然気にせんでいいけん。俺、今日は

時間いっぱいあるし。

万里 じゃごめん、そうしてくれる？ (佐和子に) 私もいていいのよね？

佐和子 いてください。

坂口 そんな俺、待つとるけん。

万里 わかった。

坂口、自分で窓を閉めて去っていく。

佐和子、紙袋から包装された包みを取り出して金子に差し出し――。

佐和子 これ、吉野君のお母さんから預かってきました。先生につて。(渡す)

金子 (受け取って) ……こんなときまで。

佐和子 渡せばわかるって云ってましたけど。

金子 わかったわ。(机に置く)

佐和子 それから、こっちは吉野君本人から。

金子 ……何？

佐和子 退部届です、吉野君の。

金子・万里 ……！！

佐和子 どうしても今日中に金子先生に渡してほしいって頼まれたので。(渡す)

金子 ……。(受け取って表書きを見る)

佐和子 今日はほんとにすみませんでしたって伝えてほしいって云ってました。

金子 そう。…吉野は今日これを持って家を出てたのね。

佐和子 満足ですか？ また一人、部員から音楽を奪って。

金子 (ややあって佐和子を見て) 帰りなさい。

佐和子 失礼します。(行こうと)

万里 (呼び止めて) ね、木村さん。

佐和子 はい。

万里 掃除をすることに反対だった最初の八人の中に吉野君も入ってたのよね？

佐和子 吉野君が掃除をするようになって私は独りになったんです。

万里 じゃ最後はあなたたち二人だったの。

佐和子 私独りになってからも音合わせにはずっと付き合ってくれてました。

でも付き合わなくていいからって私が云ったんです。私は大丈夫だから、私は負けないから、こんなの全然平気だから。そう云って。

万里 ……。

金子 退部する理由、何か聞いた？

佐和子 それ読めばわかるんじゃないですか。

金子 どうせ当たり障りのないことしか書いてないんでしょ？

佐和子 ……。

金子 いいわ、聞いてないんなら。

佐和子 不協和音がするようになったって、頭の中で。

金子 頭の中で…？

佐和子 頭の中をひっかくようなイヤあな不協和音が突然鳴り出すって云って
ました、大音量でわあんわあんって。

金子 いつから…？

佐和子 半年前から。特に部活で練習してるときにそうなるって。

金子 ……。

佐和子 今朝も学校に向かっているととき急にわああんって鳴り出して、頭の中が
爆発するんじゃないかって思ったって。それで車道に飛び出したって。

金子 ……。

佐和子 私、どんな処分でも覚悟できてますから。

佐和子、ドア前で一礼して出て行く。

そのとき、千匹の蜂の羽音が聞こえたような――。

万里 吉野君、ずっと闘ってたんですね、自分のことが許せなくて。

金子 ……。

万里 みんな何かと闘ってるんです。

金子 たまったもんじゃないわよね。

万里 え？

金子 頭が爆発しそうなくらい頭の中がわあって音を立てて騒ぎ始めたら。

万里 金子先生は、吉野君が木村さんを好きだったこと知ってたんでしょ？

金子 ……。

万里 木村さんが吉野君を好きだったことも。

金子 知ってたわ。

万里 ……。

金子 私の知り合いにね、頭の中に千匹の蜂が棲みついてるって思い込んでる人がいるの。その人、病院に行って、看護婦さんに毎日毎日耳の穴か

ら一匹ずつ蜂を捕ってもらったことにしたの、ピンセットで。もちろん看護婦さんはそんなふりをしているだけなんだけど、不思議なことに容態は少しずつよくなっていったの。

万里

………。

金子

あなたの云う通りよ、万里先生。みんな何かと闘ってる。吉野君もあなたも私も、みんな一人残らず。

万里

………そうですね。

金子

今の話ね、続きがあるのよ。ある日、私のその知り合いを見舞いに来た会社の同僚が、その蜂の話を聞いて何気なく云ったの。「でも、蜂っていうのは卵を産むんじゃないか」って。

万里

………。

金子

私の知り合いはその夜、首を吊ったわ。

万里

………何が云いたいんですか？

金子

闘っても闘っても蜂は卵を産み続けて、いつまでもいつまでも新しい千匹の蜂が頭の中に棲み続けるのよ。

万里

………帰ります。

金子

………お疲れさま。

万里、ドア前で振り返って――。

万里 金子先生。

金子 何……？

万里 私、来年の教員採用試験を受けます。

金子 どうしたの突然。

万里 でも先生のような教師にはなりません。

金子 ……。

万里 絶対になりません。

金子 あなたにも蜂が棲み着くかもしれないわよ。

万里 私はもう逃げません。

金子と万里、見つめ合ったまま――。

了

劇中に登場する「頭の中に蜂がいると信じこんでいる患者」というエピソードは、
演出家・渡辺浩子氏の遺稿集『わたしのルネッサンス』の文章から想を得ました。
付記して、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

大和屋かほる

■劇中の「松江相互銀行襲撃事件」の記事

71年7月23日、午後1時30分頃、鳥取県米子市の「松江相互銀行米子支店」に、赤軍派4人が盗難車でのりつけ、そのうち3人が猟銃やナイフを持って店内に押し入って行員を脅し、現金600万円余りを強奪した。

鳥取県警は直後県下全域に緊急配備を発令、銀行から逃げ去った車両は国鉄乗り換え駅付近に放置されているのが見つかり、犯人達は列車に乗って逃走したものと見られた。

その後、黒坂署員が県境の最寄駅から列車内検索を行なったところ、逃走犯の1人と見られる男を現行犯逮捕した。他にもタクシーで逃走中の1人も発見された。他の2人も検問にひっかかり、24日未明に逮捕された。4人は「松浦部隊」と呼ばれる実践部隊。これにより赤軍派と京浜安保との共闘が証明された。